建築史からみた当麻曼荼羅の周辺

岡田英男*

はじめに

当麻曼荼羅を安置する当麻寺本堂（曼荼羅堂）の解体修理が行われたのは、昭和三二年二月から同三五年一月の間で、修理中多くの重要な発見があった。かってこの修理工事に直接従事し、奈良国立文化財研究所長鈴木嘉吉氏、沼津工業高等専門学校長工藤圭章氏（当時奈良国立文化財研究所）らの協力を受けて調査をとりまとめ、修理工事報告書を執筆編集した[1]。

この修理工事では棟木銘による建立年代の確定、建立後の修理の経過と修理技術の解明、前身曼荼羅堂の復原、前身曼荼羅堂に転用された古材の前身建物の復原、厨子の製作年代が古代にさかのぼることを確認、その後の修理改造の状況、民俗文化財の発見などと数多くの成果があったが、特に厨子は平安時代初頭に遡り、平文・金銀絵・飾金具などで全面を装飾していた稀有の工芸品であったことが判明した。この厨子が、当初から当麻曼荼羅を安置するために製作されたことは規模からみて明らかであり、また前身曼荼羅堂も旧仏壇から大虹梁下端までの高さに厨子が丁度よく一杯に納まり、建立年代も厨子の製作と同じ頃で、前身曼荼羅堂は曼荼羅を安置するために建立されたことが明らかであった。

当麻曼荼羅が当麻寺に安置された由縁は、従来から多くの研究がある。著者はこの点について当時の阿弥陀信仰は故人の追善供養を目的としていたところから、当麻曼荼羅の安置は当麻氏ゆかりの故人の追善供養のためであったと考え、かってその見解にもふれたことがあったが[2]、広く公表されたものでなかったので、曼荼羅堂・厨子の変遷と曼荼羅安置のいきさつについて改めて私見を述べようとするものである。

曼荼羅堂の建立年代

曼荼羅堂は従来鎌倉時代の建立と考えられていた。これは厨子の仁治三年（一二四二）銘、仏壇の寛元元年（一二四三）螺鈿銘、内陣両脇大虹梁下の補強大虹梁先端の大仏様木鼻、その上にのる三斗から出る同木鼻（解体調査によればこれらは後補であったが）、背面に取付く闕伽棚が純然たる鎌倉様式を持つことなどから建物全体が鎌倉時代と見なされていた[3]。

解体修理着手後間もなく、外陣天井上の棟木（三棟造風になった外陣の棟木）から永暦二年（一一六一）の墨書が発見され[4]、平安時代末期にさかのぼることがわかった。組物の斗のせいが幅に対して高く、肘木の丸味のある曲線など承安元年（一一七一）の一乗寺三重塔、天理市の平安末期の長岳寺楼門上層に共通する平安時代の特色であった。仕事は比較的粗く、頭貫の継手や繋虹梁の差し方も

平成5年9月30日
* 文化財学科

簡単で、これもこの時代の特色をあらわすものと考えられた。

仏壇は仁治三年～寛元元年のものであるが[5]、内陣入側柱に旧仏壇上框の止釘痕があり、もとの仏壇もほぼ同じ高さ・大きさであったが、前身堂以来の仏壇がこの時に造替され、厨子も同時に大掛りの改造を受けた。

闕伽棚は基股等に鎌倉時代の特色をよく示すが、永暦当時は闕伽棚はなく、その地下に本堂基壇が通り、後から増築されている。闕伽棚の増築年代は明確でないが、本堂の屋根瓦の中に「文永五年戊辰三月日」の叩き銘をもつ平瓦が約三千枚あり、この時に屋根の修理が行われ、小屋組にも母屋を増補しており、闕伽棚の様式から見ても文永頃と認められる。瓦銘によると文永修理の勧進は良観房良秀であった。

永暦二年の棟木墨書について、別当に法務正僧正御任とあって僧名は記されていない。修理当時御任に気が付かず明らかに出来なかった。その後、奈良県教育委員会から奈良国立文化財研究所に勤務することになって、当時同僚であった鬼頭清明氏（現東洋大学教授）に、これは人名でなく、御任と読むのではないかと教示を受けた。そうすると、当時法務であり正僧正であった僧になる。従ってこの僧は、東寺長者、東大寺別当、金剛峯寺座主をつとめた当時最高位の僧寛遍であったことになる。寛遍は源師忠の子息、村上源氏で、保延五年（一一三九）法眼に敍せられ、永治二年（一一四二）広隆寺別当、天養元年（一一四四）権大僧都、久安四年（一一四八）東寺二の長者、久安六年（一一五〇）一の長者、仁平三年（一一五三）寛信に譲り二の長者に退いたが、同年寛信入滅、元の如く一の長者になり、保元元年（一一五六）法務を兼ね、同年高野大塔供養導師、任権僧正、平治元年（一一五九）東大寺別当、応保元年（一一六一）大僧正、長寛元年（一一六三）仁和寺・円教寺別当をつとめた。長寛元年（一一六三）大僧正を辞したが法務はもとのごとく、仁安元年（一一六六）入滅、歳六十七であった。仁和寺に於ては僧正の乳父筑後前司秀安が養君のため尊寿院を造った。寛遍は仁和寺理智院に灌頂堂を建立、大和春日山の東に忍辱山円成寺を開いた[6]。

これによると、永暦二年当時、当麻寺は東寺・東大寺・金剛峯寺・仁和寺の真言宗の系列にあり、興福寺に属していなかったことになる。当麻寺金堂にあったと伝える寿永三年（一一八四）棟木添木墨書[7]では別当は權僧正別当大和尚位信円、講堂の乾元二年（一一三〇三）棟木墨書[8]では別当前法務前大僧正法印大和尚位覚照でこれも興福寺別当で、永暦二年から寿永三年の間に東大寺系列から興福寺系列に取込まれたことになる。

次に永暦棟木銘に公文として名を連ねるのは置始為清であって、ここには当麻氏の名はない。当時、寺の俗的後立てが当麻氏でなくなっていたのであろう。置始氏は古代からの氏族で、壬申の乱に大海人皇子側に付いて将軍をつとめた置始菟をはじめ、歴史に名を残す置始氏は少なくない。この置始氏はその後、布施氏を名のったが本姓は置始であったらしい。春日大社の享禄二年（一五二九）石燈籠に布施安芸守行国寄進と見え、新庄町置恩寺の文亀二年（一五〇二）石燈籠には願主置始行国とあり、これは同人と考えられる。布施氏は当麻のすぐ南、布施忍海周辺に勢力を張った地方豪族で、天永三年の万才殿の所領處分状に対し、平田庄司らは、永久六年（一一一八）署名したが、その中に専当置始久行と置始行吉が署名している。その後も地方豪族として成長し、興福寺の国民となり、氏寺として置恩寺を建てた。

布施氏は室町時代初期まで越智に属していたが、後に筒井方にかわり、越智や畠山義就に攻められて焼かれている。一たん追われた布施氏・高田氏は再び郷に帰り、布施氏は万才・高田と争い、万才

郷を焼いている。その後も他国からの大和侵入もあって争いの絶え間がなかったが、松永久秀が大和を支配すると布施も焼かれている。天正一二年（一五八四）明智光秀に加担したとして超昇寺・布施・越智は悉く亡ぼされるが、元和元年（一六一五）秀頼が兵をつのると、残った一族のうち布施春行らは万才友興らと大坂に入城して亡んだ。[9]

一方、当麻氏は早く高田に中心を移している。創建時から平安時代初期までは当麻氏が当麻寺を支え、西塔建立の頃までは当麻氏の力によったものと思われるが、当麻氏は平安時代になると中級貴族の地位から脱落し、地方の郡司・庄司にその名を残す。その中で経救大僧郡のように当麻氏の出で長元八年（一〇三五）興福寺別当となった人もあった。平安時代の記録には当麻一族が平田庄庄司、広瀬郡の役人等として名があらわれる。中世には興福寺の一乗院方の国民として万才・岡・布施・疋田等と同盟を結んで、大和六党のうち平田党が成立した。大和は戦乱の中に文正元年（一四六六）畠山義就・越智家栄のため高田・布施が攻め落され、応仁の乱の間、大和でも争が繰返され、葛城山麓から高田にかけて、筒井方の高田・布施、越智方の万才氏らが勢力を争っていたが、高田と布施が万才を攻めて敗れ、越智方が優勢であった。

文明十五年（一四八三）当麻雅楽佐為長は文正・応仁の乱の戦没者の菩提を弔うため、高田に證菩提院（現不動院）を創建した。現不動院本堂（重要文化財）の文明十五年棟札によると、大願主は当麻雅楽佐為長、大工は橘成次であった。[10]

河内・大和をめぐる永い争の中で、三好政長は天文一八年（一五四九）討死、畠山義就は河内の陣中に病没、その子尚順・義豊が続いて争い、沢蔵軒宗益ら近国武士も乱入したが、大和武士は他国の武士を入れないことを決定し、永正二年（一五〇五）春日社前に大和大名衆らが盟約を結び、国判衆と呼ばれた。その中に布施安芸守行国、万才右京進則定、高田当次郎清房の名が見えるが、大和はさらに沢蔵軒のほか赤沢長経、同朝経、柳本賢次、木沢長政らによって荒らされている。

天文一五年（一五四六）には筒井順昭は越智の貝吹城を落し、筒井の大和統一が近付き、高田氏もその配下に属した。天文二四年（一五五五）、為国は陣没将兵のため六字名号碑を高田常光寺に立てている。

さらに大和は松永久秀に支配され、高田氏は筒井を裏切って久秀にくみしたが、筒井・松永の争いの続く中で、高田は再び筒井方に帰参し、天正十年久秀は信貴山城に亡び、順慶の大和統一がなった。

天正八年（一五八〇）信長は指出を命じ、郡山を除いて一切の城郭を破却、筒井は本領を安堵されると大和武士のとりつぶしを続け越智玄蕃を殺した。高田は本能寺変後の天下動揺の時に天正一四年（一五八六）帰り住み、春日大社に石燈籠を寄進して武運を祈ったが、高田三河守に筒井から参上すべき命があり、三河守は熊野へ逃げようとして果さず、筒井の追手を受けて天正十一年（一五八三）八月自殺した。豊臣秀長が天正十三年摂津・紀伊・大和三国を賜わり郡山城主となると、為政は郡山に呼出され、成敗される由を聞いて自害し、高田当麻氏は亡んだ。[11]

曼荼羅堂の後世の修理

曼荼羅堂は、永暦二年建立後、再三の修理を受けている。厨子の修造については別項に記し、建物に関して概略を述べると、先ず寛元元年（一二四三）の仏壇造替があげられる。この造替は厨子の修理と関連し、仏壇上下框間は正面は横連子、側面・背面は格狭間とし、擬宝珠高欄を置き、架木先端は蕨手となる。この蕨手の部分は

すべて新しいが平桁は古く、当初から架木先端は蔵手であった。

仏壇・高欄は目の粗い本目塗が塗られているが、擬宝珠柱の際束の取付く部分、架木の斗束に含まれている部分に目のこまかい本目塗が残るので、これが鎌倉の塗で現在の本目塗は後世の塗装であることが明らかであった。

次の修理は文永五年で、平瓦三千枚に成型時の叩き型が残り、この叩き棒に文永五年の年号がほられ、瓦では浮き上がった陽刻になっている。唐草瓦にもこの叩きの跡の残るものがあり、文様は当初の軒平瓦にならっている。小屋組の母屋に木細く丸ノミで彫った一連の材があり、この頃の補足と考えられるので、当初の母屋割は粗いものであった。

背面に取付く闕伽棚は中備えの蟇股、妻飾の板蟇股等が鎌倉時代中期の特色をよくあらわすもので、文永五年の設置と考えている。組物は出三斗、軒は疎垂木、修理前は垂木を補って本瓦葺となっていたが、本来は木瓦葺であった。木瓦葺は中尊寺金色堂をはじめとして古代末・中世の建物にかつて木瓦葺であった建物が少なくない。厚い木瓦板を並べ、半円形の木瓦棒を伏せ、高野槙材を使用している。棟積の側板と見られる小片が本堂正面の土留から発見され、講堂保存古材の中に木瓦葺の棟積上板とみられるものがあり棟積も復原された。

本堂の野地板は長さ八・五～九・五尺、巾八～九寸、厚さ六～七分の板を葺足平均四尺に葺いた流し板葺で、北面を除く大部分にこの野地板が残り、これに「康永二年」（一三四五）と墨書したものがあり、この改修年次が明確である。小屋組には桔木・小屋貫を入れて補強し、棟木を重ね、野垂木の大部分を打替え、その他側柱二本の取替、内陣つしの改修等もこの頃に行われている。正面の軒平瓦・軒丸瓦も取替えられており、この時全面的屋根替が行われている。

室町時代中頃に建立以来最大規模の修理が行われている。この修理では軒廻り・小屋組・屋根はそのまま残し、造作・壁・床・縁を全部撤去して骨組だけとした。本堂は鎌倉時代の建築とくらべるとかなり構造上不安定で、貫もなかったから、不同沈下が起き、建物のゆがみも進んでいたと考えられる。礎石上に盤木を飼込んだところが多く、外陣天井上に燧梁を入れているのはゆがみ止めのためであった。この修理は大規模でありながらその技術は極めて巧妙で、貫を各所に通し、柱多数を取替え、特に内外陣境・外陣両脇の入側柱の八本を太い欅材の柱と入替え、飛貫・鴨居貫を通して固めた。これらの柱は永暦当時、前身堂の細い柱の上部を切って組物を挿入し、正面半分に桶状の板を巻いて外陣正面の入側柱の径に合わせていた。さらに内陣両脇大虹梁の下に補強の大虹梁を補い、その上に三斗をのせて当初の大虹梁を支えた。この補強大虹梁は、背面入側柱を抜いて大仏様の木鼻を付けていたので、鎌倉時代の建立と考えられていた大きな原因であった。これらの柱の入替、大虹梁の補強等は外見から全く後補の仕事と見られないほどの見事な技術で、その後の狂いも全くなかった。また、両側面通り全体につしを整備していた。この修理の年次は直接明らかに出来なかったが、内陣床下発見の文明一一年（一四七九）の巡礼札、後補柱の落書、外陣に吊るされた延徳二年（一四九〇）の鰐口等から、応仁の乱の終わった文明九年以後に着工され、長享頃が最盛期で延徳二年には完成していたと考えられ、かなりの長期を要している[12]。

その後大永八年（一五二八）に屋根修理が行われているが、主に西面に限られ、前の修理に屋根に手を加えなかったために行われたと思われる。「大永八年」の年号のほか、追善逆修等の刻銘を持つ瓦が二十六枚残っていた。この修理の施主は宗胤で、寺内に宗胤院

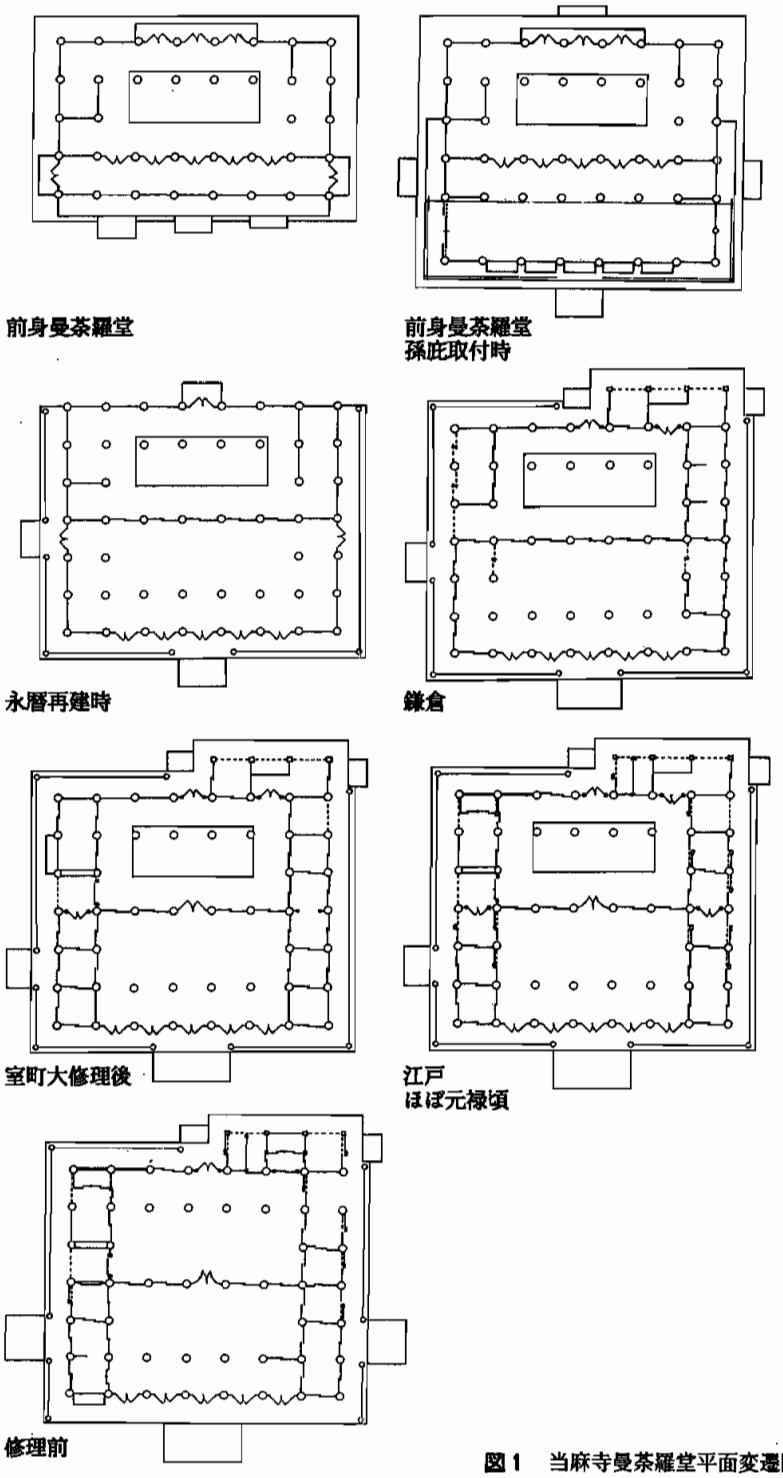

図1　当麻寺曼荼羅堂平面変遷図

を開き、屋根修理のほか、厨子格狭間に彩画した板をあて（ほとんど剥落していたが）、外陣内法長押に田地寄進銘を刻し、『実隆公記』享禄四年（一五三一）四月二三日に「当麻寺本願聖江州者云々」と見えているのが宗胤で、彼も高野聖の一人であったのであろう。

さらに天正一一・一二年（一五八三・四）に須弥壇飾金具を取替え、現在の須弥壇飾金具はごく一部を除いてこの時の補足である。正保五年（一六四八）に屋根修理が行なわれ、闕伽棚を瓦葺に改めたのはこの時の可能性が大きい。貞享五年（一六八八）銘の熨斗瓦があり、この時屋根はかなり大掛かりに葺替え、西面と北面には杉皮の土居葺を施し、小屋組の修理・縁・縁高欄の取替、周囲の石垣積替え、間仕切りの改造、闕伽棚の修理等広範囲の修理が行われ、室町時代の修理に次ぐ大修理であった。

享保七・八年（一七二二・三）の巡礼紙札を板の割目に貼って塗装しており、それまで塗装のない素木の建物であった。江戸時代末期に北妻の屋根葺替、土居葺、内部間仕切りの変更、闕伽棚の仏壇改造等、明治一八年に疊・縁の修理が行なわれていた。なお、修理工事に尺を使用したので、本文中も一部を除き尺を用いた。

前身曼荼羅堂の復原

本堂内陣に古代の二重虹梁蟇股の構架の残ることは、早く藤原義一氏が指摘されていた。同氏は小屋組に残る古材も調べられ、大虹梁に残る旧仕口も確認されたが、未発表に終わっている[13]。浅野清氏は小屋組に残る古材を調査され、現本堂以前の前身堂は桁行七間、梁間四間、寄棟造で、古材の中に長い繋虹梁・縋破風があり、正面に孫庇が付けられていたものと推定された[14]。

解体調査による復原結果も浅野清氏の推定とほぼ同じであったが、資料は一層増加し、総合的に検討した結果、その詳細が明らかとなった。

内陣の二重虹梁蟇股の構架、同背面入側柱、同側面入側中央柱の八本の柱もそのまま永暦再建堂に取込まれ、内陣の垂木も全部旧材であったが一たん打替えていた。地隅木も身舎の分が残り、庇の分は転用されていた。内外陣境の柱は室町時代に太い欅材に取替えていたが、床下大引等に旧柱が転用されており、当初柱の上部を切って頭貫・三斗・桁を組込み、その上に古い大斗肘木をのせ、柱の外陣側に三枚に分けた板を巻いていた。現在も柱一本と、これに巻かれた板二枚が残り、これに鎌倉時代初期の田地寄進銘があり、このため特に堂内に保存されていた。

旧側柱も六本が現在も側柱に転用され、内外陣境から廻された柱二本があり、永暦には正面側柱八本、同入側柱六本のみ新材を用い、他は旧材を再用していた。発見古材の中に頭貫・桁・繋虹梁・肘木・地垂木・飛檐垂木・地隅木・飛檐隅木・茅負・切目長押・内法長押等があり、頭貫は土居・野隅木・外陣梁・棟木等に転用され、所要数二二間中一九間分が発見された。

地下調査によると内陣部の礎石は据替えられた形跡がなく、外陣地下から石と瓦を積んだ前身堂正面基壇が発見され、中央間と一間おいた各二間目は基壇が切れ、もとここに孫庇の取付く以前の階段があった。なお、このほかでは礫郭墳一基が発見されたが、掘立柱穴等はなく、ここにさらに古い建物が建っていた形跡は全くなかった。

前身堂の柱間寸法は平均九・八二五尺、一〇尺の計画とすれば一尺は二九・七七㎝、奈良時代の標準を二九・五㎝とすればやや長い。側柱上の組物は残り少なく、僅かに二つに切られた肘木一丁、内外陣境転用の大斗二個、繋虹梁は土居に転用のうち、八丁は前身堂新補材、一丁は大虹梁転用、側桁は大引・小屋組・内外陣境入側桁に

転用していたが、古材を造り替えたものを多く含み、新補材は楠科雑木のタブで細くねじれも大きい。側桁は二二間中一三間残り、せい・幅とも七寸弱、上端に水平の部分があり、地垂木は一部を釘止めとした。入側桁では全部釘止とし、先端は木負で止めれば側桁では全部釘を打つ必要はなかった。

庇の地隅木は野棟木に三丁、土居に一丁転用されていた。何れも二間材を転用していたが、当初から先端の長さがやや不足していた。この鼻の継木と見られる小舞穴と上端大釘痕のある古材があったが、地隅木のような重要な構造材に継木をするようなことは考えにくいことであり、しかも飛檐隅木を重ねて二軒としていたから、極めて胡息的な仕事であった。木取りの都合と屋根が軽い葺材であったため止むを得ず継木としたのであろう。

地垂木は根太・大引・野垂木・小屋束・床束等に転用されていたが、木口を切られたり上端を削られていて全長の旧形を残すものはない。上端にえつり穴をほるが、転用材が多く、えつり穴は一・八尺割と二尺割の二種を持つものが多い。一・八尺割のえつり穴が古く、主に二尺割のえつり穴が前身堂に用いられた。このほか、二・二尺割程のえつり穴一回をもつ垂木もあったが、これは孫庇の垂木であった。

地垂木の元の丈は・三八尺、肩の丈・三五尺、幅・三一～三八尺、上端両肩に面を取り、中央に低い峯を作る。側桁当たりから木口まで四・三尺強のものと四・二尺ほどのものがあるが、正面と側面、あるいは背面と使い分けていたのであろう。

飛檐隅木は三丁土居に転用されていたが、いずれも合掌の転用で、茅負落掛り、垂木止め釘痕、地隅木に止めた大釘痕、木負にかぶさる仕口がある。

飛檐垂木は束・飼物に転用され、茅負・木負止釘痕を残すものは二丁、他に断片四丁あり、上端にえつり穴一個のものが多く、上端下端ともに僅かに反りがあり、茅負ののるところは平らに削る[09]。古代の飛檐隅木・飛檐垂木の残存するのは極めて珍しい。法隆寺伝法堂で復原された飛檐垂木よりやや木細く、上下に反りがわずかながらあるので、年代的にも多少の差が考えられる。茅負古材は外陣野天井小舞に四丁転用され、四方削られていたが断面L型で、内面上端に垂木割と合う小さな欠込みをもつものが二丁ある。

このように前身堂の軒は二軒で各柱間を一〇支に割り、垂木の上はえつり穴に小舞をあみ付けて下地を造り[09]、下から土を塗り上げていた。軒廻りを引付けてみると地垂木の出は正面四・二七尺、その他四・〇二尺、飛檐垂木の出二尺強となる。

周囲に切目長押を廻していたが、柱に込栓を植えて受け、さらに釘止めとしており[10]、同長押四丁のうち二丁に扉軸穴があり、当初から床張りであった。柱間装置は柱に残る痕跡から、主屋は側通り正面開放、背面中央三間扉口、側面前端間扉口、その他土壁、後に側面前端間を土壁に変更している。

正面が吹き放しであったことに対し、身舎正面は中央五間扉口で、一度改造している。床構造の改造、孫庇の設置などと一連の仕事であろう。仏壇に関しては背面入側柱に上框止釘痕があり、現状よりやや低い高さ一尺程度の仏壇が背面入側柱を取込むように設けられていたが、この仏壇は永暦にはこのまま残され、ややおくれて仁治寛元に造り替えられた。

転用古材の中に長い繋虹梁三丁があり、地下調査においても外陣地下から礎石据付痕が発見され、正面に孫庇が取付けられていた[10]。主屋正面側柱通りからの出は一六・四七尺と算定され、両妻の繋虹梁には蟇股の太枘穴があり、中間に母屋桁があった。孫庇の発見古材には繋虹梁・組破風のほか、頭貫・側桁・肘木・母屋桁・同肘木・

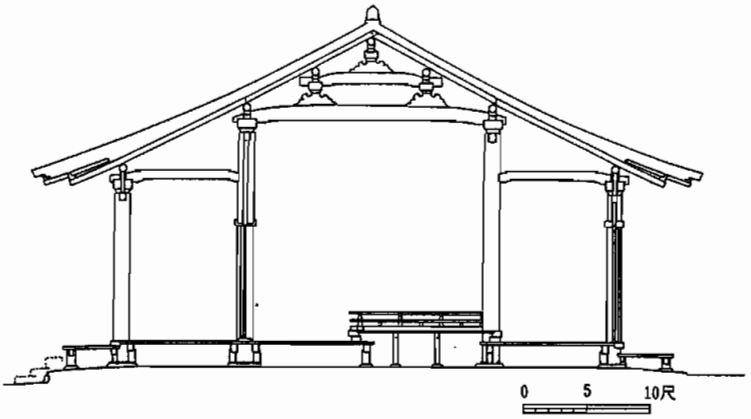

図2　前身曼荼羅堂梁行復原断面図

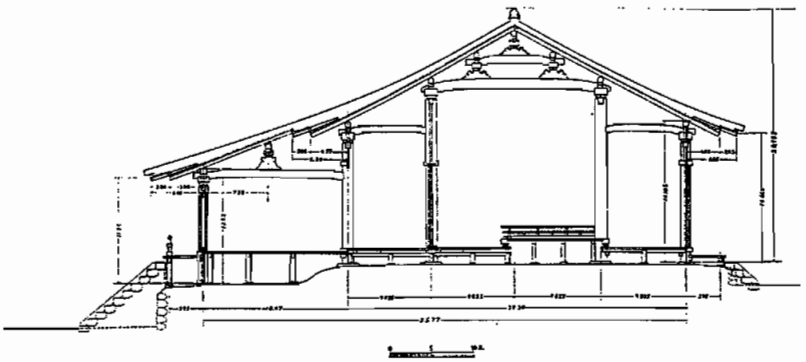

図3　前身曼荼羅堂孫庇取付後復原断面図

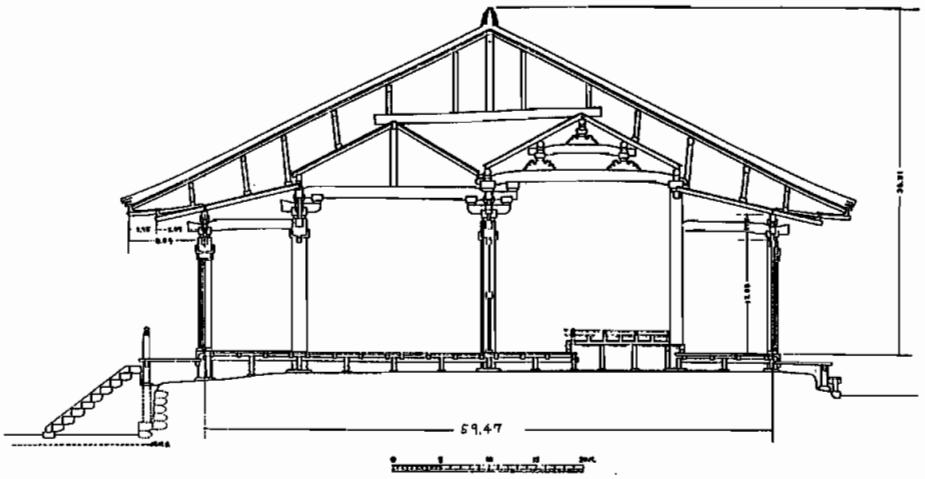

図4　曼荼羅堂現状断面図

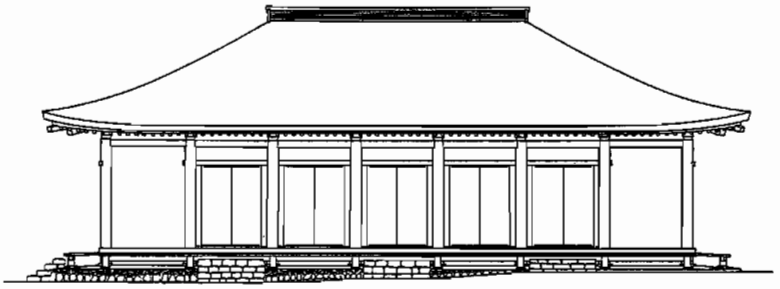

図5　前身曼荼羅堂復原正面図

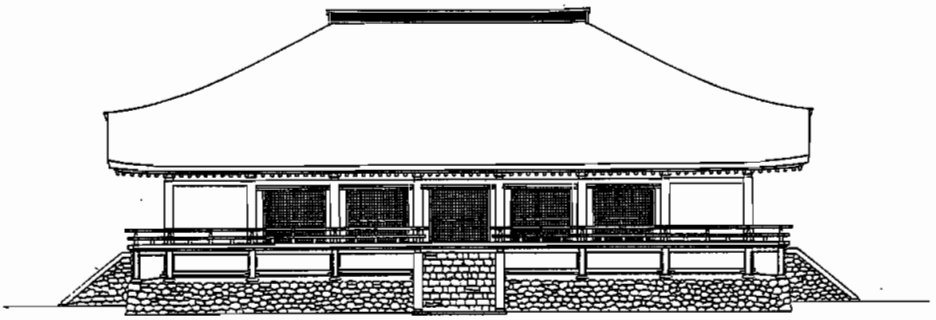

図6　前身曼荼羅堂孫庇取付後復原正面図

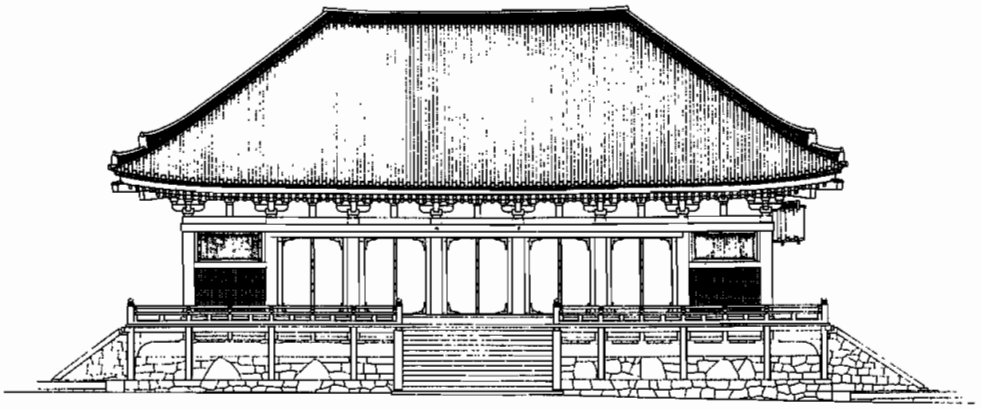

図7　曼荼羅堂現状正面図

地垂木・床桁・敷居・長押で柱は短かったためか残存しない。組物は大斗肘木で、繋虹梁を挟んで桁・肘木と組んでいた。古材は主として孫庇の後に設けられた外陣部に転用されていた。孫庇母屋桁の螻羽にはかなり強い反りがあり、側桁の螻羽の出よりやや短く、支外垂木のみを受け、縋破風に達っしなかったらしい。このあたりの納まりも古風である。

軒廻りでは地垂木が外陣野天井に多く転用され、えつり穴の割が主屋と異なり、上端は平らで角の面や峯はない。木負止め釘痕をのこす垂木は一丁のみで、多くは木負とも止めなかったらしい。縋破風の尻は飛檐隅木鼻にのり、地垂木尻は主屋茅負か飛檐垂木に枘差となっていた。

孫庇の柱間装置は北妻は土壁、南妻は発見古材の敷居により両脇に袖壁の付く引分戸、正面ははじめ格子戸と考えていたが、蔀戸と考えた方が良かったようである。

屋根は桁の地垂木当たり形が少ないこと、地隅木の鼻に継木をしており、旧正面瓦積の中に積み込まれた瓦を除き、古い瓦の出土がなく、現在の瓦はすべて永暦以降であったから、前身堂は瓦葺ではなかったと考えられ、垂木のえつり穴がよく通ること、茅葺や板葺とは考えられないことから桧皮葺と推定している。

前身堂の建立年代は二重虹梁蟇股の形、上端に水平部分のある円形の桁、上下全体に反りを持つ飛檐垂木、天平尺よりやや長目の尺度等、奈良時代の形式をよく残しているが、やや降ると考えられ、平安時代初頭と推定している。孫庇は正面の旧基壇の残存からみて後から設けられたものに違いない。身舎の扉口・床の改造等と併せて考えると、一世紀位は降ると思われるが明確な根拠はない。主屋よりややおくれ、後補であることは確実であった。

前身曼荼羅堂転用古材による前身建物復原

本堂の内陣大虹梁に蟇股のほかに合掌仕口のあることも藤原義一氏・浅野清氏によって指摘されていたが、解体してみると、大量の前身堂部材が古材の転用であった。前身堂で新材で補われたのは二重虹梁・組物・桁・長押等にすぎず、入側柱には前身堂で全く不用の楣仕口穴、壁間渡穴、長押受け込栓と止釘痕があった。蟇股には合掌の二枚枘仕口が持つものが多く、仕口長さが現大虹梁より短いので別種の大虹梁転用と判明した。頭貫・桁・棟木・隅木等は前身建物の桁・棟木の転用が多く、入側桁には垂木止釘痕が二回あり、側桁では垂木ごとに垂木止めのえつり穴を持つ材と、柱間に三ヵ所のえつり穴を持つ二種があり、柱通り位置下端に山型の合掌拝みを受ける仕口をもつ材は棟木古材、飛檐隅木はもと合掌の古材で、垂木の多くも前身建物以来のものであった。桁下端の柱丸枘穴、大虹梁と入側桁の仕口から柱天に直接桁がのり、その上に大虹梁が架り、合掌で棟木を受ける簡単な構造で、側桁では垂木ごとにえつり穴をもつ材は各柱位置に繋梁の仕口があるが、もう一種では両妻にのみ繋梁仕口があり、中間には繋梁がなく、垂木だけで繋いでいた。妻の叉首台に当たる陸梁が一丁あり、叉首棹と叉首束及び壁小舞穴があった。大虹梁の一丁にも叉首束仕口を持つものがあるが、これは内部の間仕切に当たるものと考えた。

腰長押等の込栓と止釘痕及び楣の大入仕口は上下二段にあり、この間隔は柱によって差があった。腰長押と上端揃いに床を張っていたが楣仕口から上の小壁の部分の高いのが前身建物の特色である。軒は一軒で、垂木上端にえつり穴があり、一部の垂木には側桁にくくり付ける小さい欠込みを両肩に作っていた。

構造は極めて簡単ながら丈の高い建物に復原されるが、このよう

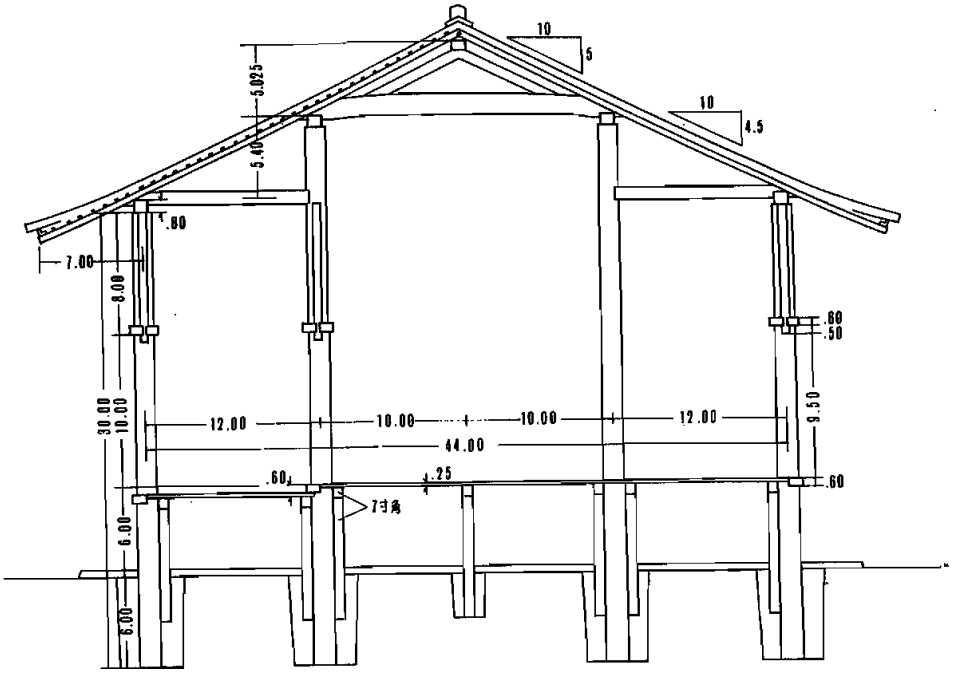

図8　前身建物復原断面図　其の一

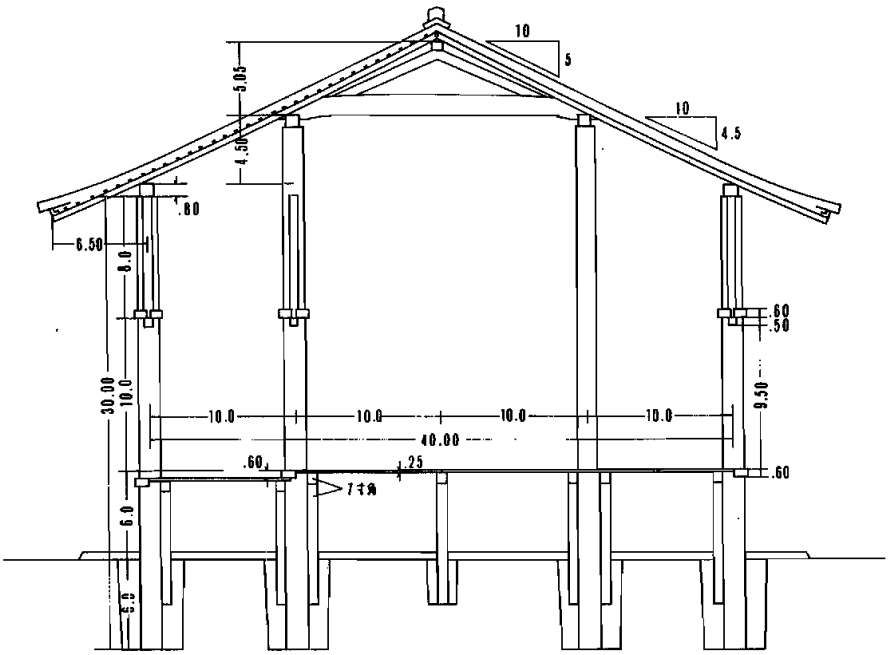

図9　前身建物復原断面図　其の二

な構造はもと掘立柱であったと考えた。柱穴で足元をしっかり固めれば構造は簡単でよかった。二段ある腰長押込栓や楣仕口の間隔に差があるのも、掘立柱を一たん解体して柱を抜取り、再用するに当たって改めて柱天に水糸をはって水平に切揃えて高さを調節し、仕口もほり替えた結果と考えた。掘立柱建物として二回使われていたことになる。

小壁の特に高い建物の実例としては京都御所の紫宸殿、清涼殿、橿原神宮に移建されているもと賢所の本殿、もと内侍所の御饌殿（平成五年二月四日火災大破）などの宮殿の建物があり、前身建物ももと宮殿関連の建物であったと考えられる。古代の掘立柱建物の構造が復原されたことは特に重要な成果と考えられ、平城宮等の掘立柱建物の復原に重要な基本的資料を提供した[19]。

厨子の製作と修理

厨子の製作年代が鎌倉時代とは思われず、調査をすればさらに古いものかもしれないことを指摘されたのも浅野清氏であった[20]。現在、美術工芸品当麻曼荼羅厨子として国宝に指定されているが、解体修理当時は建造物の付指定であったから、この修理も計画の中にふくまれていた。修理着工後間もなく、まず厨子の中に入って見上げたところ、天井板に黒漆地に宝相華が描かれ、台輪・桁の内側にも一面に金銀絵が描かれており、指摘どおり、この厨子が古代に遡ることが確認された。さらに扉口・菱欄間・連子の敷鴨居を取外すと、その胴付となっていた柱面からも金銀絵が確認され、不正五角形の柱内面は後の塗替を受けず、全体に宝相華・鳥・蝶などの金銀絵が残り、格狭間は後世の塗重ねを受けていたが、古い文様が浮上がって見えていた。飾金具にも一部古い透彫の金具が残り、その下は朱を塗られており、柱足元の根巻金具も古かった。これは厨子製作中に高さを変更する必要を生じ、当初長押に計画した柱仕口に正面から横板をはめ込んで柱仕口を埋めて台輪とし、台輪上に乾漆の獅子をのせて八角の桁を受けた。柱足元に根継をして、基壇の上に出た柱の丸く削った部分に板を添え根巻金具を付け、柱根継下の基壇内の土台に板を敷いていたが、その一枚に人物の像の落書が描かれていた。

軒はてり起りの曲面に削った軒板を前後二段に付けて二軒風に作り、六角の隅と正背面中間二ヶ所に隅木を入れ、その先端を蕨手状に作っていた。現在軒板は黒漆塗であるが、板の表面に凹凸があり、何か文様があるらしく、平脱の技法による文様と推定されたが、漆芸家北村大通氏によって、これが大掛りの平脱による装飾と判明した。内側の板は正面中央から分かれて背面で向かい合うように宝相華・瓔珞をくわえた鳥、外側の板は正面から背面に向かう飛天の文様が施されていたことが明らかとなったが、このような大掛かりの平脱の遺物は他になく、まさに稀有の古代の工芸品であった。

現在、正面と背面に扉が吊込まれ、上に横連子をはめ、側面は下方を横連子、上方を菱欄間、台輪下を横連子としているが、これらはいずれも仁治三年（一二四二）の修理に取付けられたもので、背面扉口はその後にさらに改造されていた。柱にはこれら以外に部材の取付いた形跡はなく、当初基壇から立つ六本の柱のみで、台輪以上の軒・屋根を支え、柱間は開放であった。

基壇は二重であるが、柱は下成基壇を貫いて下の土台上から立ち、上成基壇を柱で取囲んでいる。格狭間は羽目板の前面に束と格狭間の脚をはり付けたもので、格狭間の脚の形も古風で奈良時代の脚の形と相通じる。台輪上端、桁下端、獅子の側面に小さい金具が打たれ、台輪の獅子枘穴から穴のあいた小さな瑠璃玉が発見されているので、台輪・桁の間は細い針金に瑠璃玉を通して飾っていた。隅木

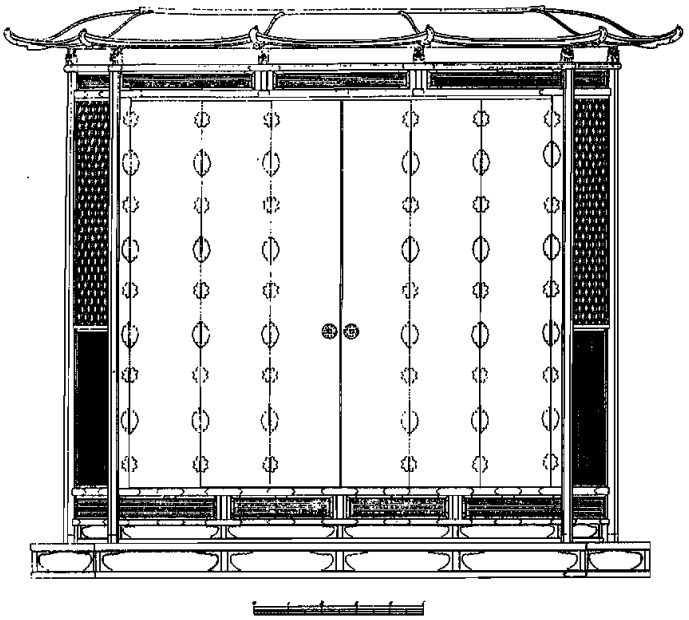

図10　当麻曼荼羅厨子正面図

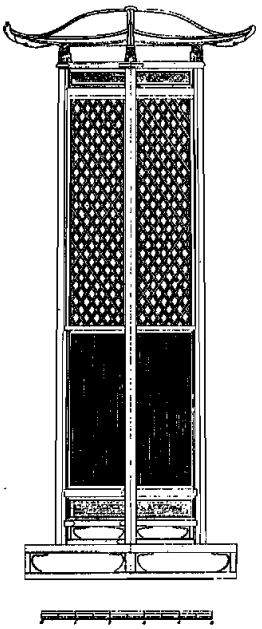

図11　同側面図

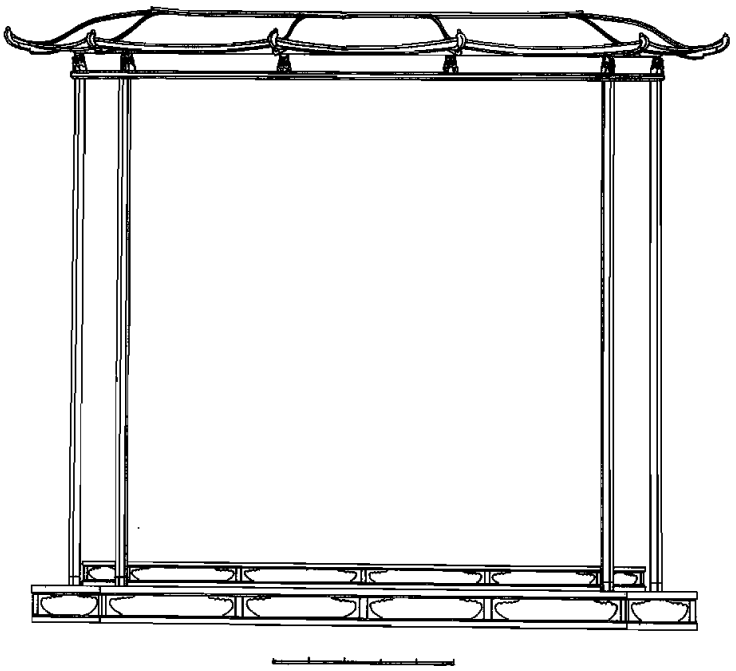

図12　当麻曼荼羅厨子復原正面図

の先端に蕨手をかぶせ、その反転した上端に宝珠形（花玉）のような飾をのせ、金具を通して隅木に止めていた。この金具の先から幡を吊るしていたものと考えられるが、蕨手には当初材はなかった。また、『西大寺資財流記帳』に見える漆殿・厨子等では敷褥があげられている。当麻寺の厨子でも同様に基壇上に褥を敷いていたのであろう。

屋根は照り起りで、上端に布を貼って漆塗とする。蕨手の尻は降棟となり、中央に大棟を通していたと考えられる[21]。

このような大型で全面的に装飾された古代の厨子は他に遺例はないが、東大寺の阿弥陀浄土変相図をまつった宝殿は八角で、二重の基壇に八本の柱が立ち、八角の蓋の頂に金花形、八隅に雑玉幡を咋えた金鳳形があり、金銀墨を以て飛天・鳥・雲・花等を描き、形態・装飾とも類似点の多いものであった[22]。

『西大寺資財資記帳』では、薬師金堂の観世音菩薩捻像を納めた六角殿、厨子七基のうち、六角漆殿二宇などが同系の工芸品である[23]。また、類似点の多いものに高御座がある。『延喜式』の「内匠寮・内蔵寮」によれば八角で、頂上に鳳像を立て、八角に小鳳像を立て下に玉幡をかけ、各面に鏡を吊ったもので、『文安御即位調度図』によっても類似するところの多いことが知られる[24]。

厨子は鎌倉時代になって扉を吊り、連子・菱欄間・横連子で周囲を囲い、破損著しくなっていた曼荼羅を枠組の板に貼り付けた。正面扉には内面に多数の結縁者名を金蒔絵であらわし、正面には金研ぎ出し蒔絵で散し蓮花を施した[25]。この時、外部全面の漆を塗替え、軒裏の金平脱の跡も黒漆で塗重ねた。正面扉を吊込む方立には宝相華の金蒔絵があるが、方立足元の扉口敷居に隠れる部分に別種の金蒔絵の宝相華が残るので現在の金蒔絵は後補である。その他連子の框等に宝相華の金蒔絵を施した形跡が後の塗重ねの下に見られる。正面扉板裏面に人名を記した末尾に、北から一枚目扉板に「仁治三年壬寅次五月廿三日大勧進阿闍梨禅良」の蒔絵銘があり、他に菱欄間下框・正面蝶番から同年の墨書が発見されている[26]。

寺僧名の筆頭は証空であり、上人が曼荼羅の研究ばかりでなく、この改修にも力を盡されたことがわかる。この扉銘自体の書き出しが「曼荼羅御厨子修理結縁衆等」とはっきり修理とかかれているので、この厨子が仁治以前であることは自明のはずであったが、鎌倉期の多くの人名や、連子・欄間に囲まれた状況からこの時の製作と判断されていたのであろう。

また、南から一扉に金蒔絵で「陸奥守平朝臣時茂」の名がある。平時茂は『尊卑分脈』桓武平氏の義時の孫に当る陸奥守従五位下の時茂と思われるが、同人は文永七年に三一才であり、仁治三年には三才であったことになり、後からの追加と見なければならない。枠の外の人名は幾度か書き加えられていると思われる。扉板の漆塗の下に塗込まれた人名も多数見え、この扉板の金蒔絵の全部が仁治当時のままであるか検討の余地があるように思われる。

その後の厨子は享徳二年（一四五三）に漆塗修理が行われた。下成基壇格狭間にこの時の朱漆銘があり、仕手之人衆として二二名の漆工の名を列記し、二ヶ月を要しており、この銘の記された黒漆面の続き具合から見ても、厨子・仏壇にかなり大掛かりの漆塗を行ったと考えられる。厨子方立の金蒔絵、柱の朱漆の龍、仏壇・高欄の粗い杢目塗もこの時のものであろう[27]。

大永八年（一五二八）に下成基壇正面・側面格狭間に彩色を施した板をあて縁金具で止めている。この施主宗胤は同年の本堂丸瓦銘・同七年の外陣内法長押寄進文、同年の名号板碑に名を残し、近江の人のようで山内に宗胤院を創建した[28]。天文一七年（一五四八）背面扉内に格子が寄進され、天正一一・一二年に金具補足が行われた。

延宝五年（一六七七）から同七年、根本曼荼羅を板から剥がして軸装に改めたが、この時厨子にも改造が加えられた。曼荼羅を貼っていた板は合釘を切り、胴縁とともに三枚に切放してそれぞれの位置で反転し、枠組正面に新しい板を張った。本尊との関係は左右逆となったが、現在裏板曼荼羅と呼ばれている。背面扉では敷居を下げて扉板を造り替え、厨子天井と屋根の棟から正面通りを横に切り明けて、天井から上を箱形に作った。厨子上成基壇前半の床板は鎌倉時代に張替えていたが、後にこれを撤去している。正面鴨居添木に打った慶安三年（一六五〇）の金具に貞享元年（一六八四）の追刻銘があるが、高い場所で足代がなければほれないところであり、改造はこの時であろう[29]。本堂解体修理の際に厨子も修理したが、基壇・天井・屋根は大放しとした。

曼荼羅の模写と修理

当初の当麻曼荼羅は現在軸装に改められて宝蔵に収蔵され、現在厨子に懸けられている曼荼羅は文亀曼荼羅と称する写本である。

当初の曼荼羅は中将姫が感得し、蓮糸を以て化女が一夜のうちに織りあげたと伝えられている。この根本曼荼羅については龍村謙・大賀八郎氏により蓮糸ではなく、絹糸の綴織であることが確認され、現本は縦三・九一m、横三・九六mで、観無量寿経に説かれる韋提希婦人の物語、浄土を観想する一六想観と九品の往生の様と阿弥陀浄土の様が描かれ、古くは敦煌石窟に多く描かれるが、当麻曼荼羅のような形態の浄土変相図は盛唐期に完成されたようで、これらについてはとくに河原由雄氏の研究に詳しい[30]。

当麻曼荼羅は龍村謙・同平蔵氏によると、大略の計算で下絵に二年位費やし、織出して八年位かかる。仮に同じように織り得る織女を四人揃えても二・三年の根限りの努力を要すると云われ[31]、大賀八郎氏も一平方米織るのに一年の日時を要するとしても、一六年の長期を要すべき一大作品であると推測されている[32]。当時のわが国の令制度では大蔵省被官に織部司があって、錦綾紬羅を織ることを所管し、中務省の内蔵寮でも錦綾を扱っていた。内匠寮の織錦綾羅等の匠手は延暦一五年（七九六）に内蔵寮に所管替となっているが、当麻曼荼羅のような大作を織る技術があったとは考えられず、その遺品もない。太田英蔵氏・柳沢孝氏らはこれを中国からの舶載と見られているが、中国に於いても稀に見るものであったろう[33]。

曼荼羅は当初節なし竹を軸としてかけられていたと伝えられるが、厨子には曼荼羅懸垂に関する痕跡は見られなかった。現在大虹梁に丸太を渡して上から吊っている。背面側の屋根板と天井板に二ヶ所の穴があったが（天井板の一方は欠失）、鼠にかじられて古い仕事かどうか判定出来なかった。修理前は厨子の前寄りの屋根板・天井板を切り、大棟も撤去して箱形に板で囲ってここに文亀曼荼羅を吊っていた。当初は野間清六氏が云われたように袷仕立にして吊下げていたのであろうから、重量もそれ程のものでなく、側面の台輪間にでも吊下げられたのであろう[34]。

曼荼羅の下端中央に縁起を書いた銘文帯がある。文亀曼荼羅に全文が記されているが、後世の述作の可能性も指摘されている。『当麻曼陀羅注』にも全文が見えるが、鎌倉時代初期にはほとんど見えなくなっていたようで、『建久御巡礼記』には、

彼寺僧申織仏事無樋日記、但此曼荼羅下縁不壊之時、天平宝字七年云年号、樋被織付タリキ、

とし、証空の『曼陀羅注』に於いても巻第一に、

当麻寺僧法名見阿齢余八十、而自攀来西山謁云。（中略）次年又来云。吾二十四五之昔。本師阿闍梨実名覚仏老耄後語我云。此曼荼羅下書井銘文欲消。吾幼少古写留之。

と不思議な縁を述べている。また当麻曼荼羅の古い写本、正安四年（一三〇二）の京都禅林寺[35]蔵や高野山清浄心院蔵の曼荼羅などは、銘文の一部のみ記している[36]。実際はすりへって当時すでにほとんど読めなくなっていたのであろう。

その後、破損の進行のために曼荼羅を板に貼付けた。この枠組は縦一三・一八五尺、横一三・四〇尺に周囲に框を廻し、胴縁を二通り入れ、板・縦框の傍に合釘を立て、胴縁に釘止めとしたもので、現在は江戸時代に板を三部に大放しに切離して背面に廻し、正面には胴縁を入れて厚さ一・二㎝の板を打っているが、周囲の框をふくめて全面に粗い麻布を漆で貼り、この上に根本曼荼羅を貼付けていた。框の正面には現在も麻布が残る。この貼付けた時期は明らかでないが、仁治修理の時と伝え、少なくともこれを降らないと認められる[37]。

この枠組を厨子の中に納めるため、厨子上成基壇の南側面東方上框と羽目板を切断し、北側面では切るつもりでやめており、枠組の側面に各二個の鉄製吊環金具があるので、外で組立て曼荼羅を貼付け、横から厨子に納めたもので、撤去した前半分の床板は、框に別の根太枘をほっているので、一たん復旧しさらに後に撤去していた。仁治後補の敷鴨居等は切断されていないので、仁治三年に扉・連子・欄間を補った際かそれよりやや早く板貼りに改めたのであろう。

鎌倉時代初期に第一回の曼荼羅模写が行われて、建保曼荼羅と呼ばれている。現存しないが、『大乗院寺社雑事記』、『当麻曼陀羅疏』等に見えており、『当麻曼陀羅疏』によれば承元二年（一二〇八）当麻寺住恵阿弥陀仏が発願し、建保四年（一二一六）阿波国浦庄で一丈五尺の御衣絹を得、絵師源尊らが描き、五年八月叡賢に備え、蓮華王院宝蔵に納め、貞応三年（一二二四）藤原行能が銘文を書き、当麻寺に納められたと云う[37]。

室町時代に建保曼荼羅は寺を離れて興福寺一乗院にあったが、延徳三年（一四九一）一〇月、勅によって京に運ばれて清涼殿庇に懸けて拝見され、奈良へ帰り大乗院で開帳された。建保曼荼羅の御衣絹は上下一丈三尺四寸八分、このうちで上下表法二尺二寸、上下各一尺一寸、横幅は一丈三尺四寸七分、左右表法一尺七寸二分、各八寸六分、軸長さ一丈三尺六寸七分でこの軸は根本曼荼羅の一夜竹であったと『雑事記』に伝えている[38]。後述の文亀曼荼羅模写の原図とされたと考えられる。明応七年（一四九八）四月に他所に出たため、一乗院が買いもどし、もとのように納めたと伝えられるが、その後の消息は全くわからない。『後法興院記』の文亀三年（一五〇三）七月九日の項に文亀曼荼羅の銘文の宸筆を願い出た状の中に「当麻曼荼羅依畠山両家之乱焼失云々」と見えるが、明応七年から文亀三年の間に失われたことになる[39]。

現在厨子にまつられている曼荼羅は文亀曼荼羅で、その製作の事情は『大乗院寺社雑事記』などによって明らかであるが、江戸時代の修理に取りはずされた旧軸に長文の銘があってその製作の由来が明らかである。曼荼羅堂の大修理が延徳二年（一四九〇）頃に完了すると、続いて曼荼羅製作のため、開帳や勧進が始められたが、画工の不祥事のため永正二年（一五〇五）になって模写の功を終わった。立筆は当麻寺客僧観阿弥陀仏、画工は慶舜らであった。文亀三年後柏原天皇が国母准三后藤玉門院の菩提のため銘文を書かれ[40]、永正四年興福寺東北院に於いて願供養が行われ、願主覚円によって当麻寺に納められた[41]。

この銘文に見える執行少別当は平則定である。創建当初は当麻氏の氏寺であったと考えられるが、永暦二年の棟木銘では公文として置始爲清が見られ、これは布施氏であったことを先に延べた。平氏は当麻寺薬師堂の文安四年（一四四七）の棟木銘と享徳二年の厨子

朱漆銘（注27）では執行少別当平則満となる[47]。永正二年筒井党と越智党の和議が成立し、春日社前において大和大名衆が盟約を行った中で、高田当次郎清房、布施安芸守行国らとともに万才右京進則定が見えるので、平氏の本姓は万才氏であった[48]。

万才氏は古代葛城氏より出た豪族で、平田庄の庄官の一人として次第に勢力をひろげ、万才郷二十二ヵ村を支配し、この中に当麻郷もふくまれていた。応永一四年（一四〇七）の春日文書「平田庄庄官請文」に八庄官として布施行忠・高田烏益とともに万才則盛の名が見える。室町時代には布施氏にかわって万才氏が当麻寺の後援者となっていた。万才氏は筒井順慶に従って信長の軍に従軍し、各地に忠勤を励み、天正一二年（一五八四）伊勢一揆の松ヶ島城二の丸を乗取ったが、万才氏らに多数の死傷者が出て、万才氏の名はこの時で消え、余党が故郷に残った。

筒井に従って伊賀に移った大和武士も定次が慶長一三年（一六〇八）とりつぶされると浪人し、他の大名に仕官したり帰農したりした。元和元年（一六一五）秀頼が兵をつのると万才友興・布施春行らが大坂城に入城したが多くは倒れ、あるいは逃れて民間にひそみ、大和武士の名は全く姿を消し、わずかに布施孫兵衛が家康に召出され、筒井の家臣中坊左近秀政が奈良奉行に任ぜられたにすぎなかった[49]。

貞享曼荼羅の模写と古曼荼羅の修理

仁治の厨子大修理から約四百年をへて延宝五年（一六七七）京都大雲院の性愚上人を本願として根本曼荼羅・文亀曼荼羅の修理、重新々曼荼羅（貞享曼荼羅）の模写が行われている。根本曼荼羅を板から剥ぎ取って軸装に改め、板に綴織の痕跡が残ったので、三部に大放ししてそれぞれの位置で反転して裏板曼荼羅と呼ばれている。曼荼羅の上に和紙を貼付け、水をかけてはがしたので紙にも像が移り、三尊の分は印紙曼荼羅として京都西光寺に伝わる。

根本曼荼羅の修理は延宝五年五月一四日着手、補筆補色して同年閏一二月一五日に功を終わった。文亀曼荼羅の修補は同年一〇月一〇日より同六年二月一五日に行われた。貞享曼荼羅の模写は五年一〇月一五日に講堂で始め、画工良慶・宗慶により彩色、同七年一〇月二三日に終え、貞享三年（一六八六）一二月二八日霊元天皇の御宸筆を賜わった[50]。延享二年（一七四五）に知恩院で文亀本との彩色の違いを修整した。またこれより少し前、延宝二年に奥院の英誉梵貞が文亀曼荼羅の忠実な模本を作った。曼荼羅堂修理の時に破れていた貞享曼荼羅の表装も修理した。軸内から結縁帳・願文等が発見されたが、もとのように納められた。

厨子の製作と内匠寮

先に述べた全面に装飾された華麗な厨子は、当時の当麻寺自体や当麻氏一族の力で製作されたとは到底考えられない。造東大寺司のような大きな組織であれば、このような各種工匠の協力を必要とする工芸品の製作も出きたと思われるが、延暦八年（七八九）に造東大寺司が廃止されているから、当麻寺厨子との関連は考えにくい[51]。

このような厨子の製作機関として推定されるのは神亀五年（七二八）令外官として設置された内匠寮が考えられる。『続日本紀』及び『類聚三代格』の「加減諸司官員幷廃置事」によれば、内匠寮には頭・助・大允各一人、少允二人、大属一人、少属二人、史生八人、直丁二人、駈使丁二十人があった。大同四年（八〇九）の「太政官符」によれば、長上工二三人は畫師・細工・金銀工・玉石帯工・銅鉄工・鋳工・造丹工・屏風工・漆塗工・木工・轆轤工・捻工で、番上工百人には上記のほか、革莒工・黒葛莒工・柳箱工が属していた。

これだけの職種の工匠がおれば、当麻曼荼羅厨子の製作が十分可能であろう[47]。

内匠頭・助の任官記事も多く見られるが、天平宝字七年（七六三）正月に従五位下陽胡毗登玲璃、神護景雲元年（七六七）には三月に同石上朝臣真足、七月に同賀茂朝臣大川、八月に外従五位下松井連浄山を内匠助、宝亀三年（七七二）十一月に外従五位下日下部直安提麻呂を内匠助とするなど、助の任官が多く見られる[48]。神後景雲元年に造西大寺長官・次官、造西隆寺長官・次官が任命され、両寺の造営の進む時期[49]で、『西大寺資財流記帳』に見える工芸品的な漆殿・厨子などの製作にも内匠寮の助力と考えるのが最も適切と思われる。

古代の阿弥陀信仰と当麻曼荼羅

当麻曼荼羅が観無量寿経による阿弥陀浄土変相図であることは云うまでもない。『日本書紀』には舒明十一年（六三九）九月帰国した大唐学問僧恵隠が無量寿経を説き、白雉三年（六五二）四月、恵隠を内裏に請じて無量寿経を説かしめ、恵資を論議者とし、沙門千人を作聴衆としたことが見え、この頃から阿弥陀信仰が広まったと考えられ[50]、遺物では「山田殿像」の刻銘のある三尊像があり、薬師寺講堂に天武天皇のため持統天皇が発願された繍阿弥陀浄土変がまつられたが、これも天皇追善のためであった。

井上光貞氏らによると、古代の阿弥陀信仰は自己の往生を願うのではなく、故人の浄土への往生を願ったもので、藤原時代以降の阿弥陀信仰、浄土教芸術とは本質的に異なり、追善供養のための礼拝対象であったことが強調されている[51]。

光明皇后が天平宝字四年（七六〇）六月七日薨じると、七七日の斉が東大寺及び京内諸寺で行われ、諸国に阿弥陀浄土画像を作ることを命じ、翌五年の周忌の斉は法華寺阿弥陀浄土院で行われ、諸国の国分尼寺に阿弥陀丈六三尊像の造立が命じられ、毎年勅により忌日より七日間、阿弥陀仏礼拝の法会が行われた[52]。

興福寺東院の西桧皮葺堂の東方にまつられた繍阿弥陀浄土変は藤原仲麻呂が天平宝字五年仁政皇后（光明）のために造像した。同東瓦葺堂の阿弥陀像は贈正三位尚侍尚蔵藤原夫人（百能）が往生の因としてつくり、東桧皮葺堂には従三位尚侍尚蔵大野命婦と従三位治部卿藤原家依が太政大臣藤原（永手）のために造立した阿弥陀三尊像が安置されていた[53]。

延暦一〇年（七九一）三月一〇日、藤原皇太后の周忌の斉会のため丈六阿弥陀三尊が造立され、不空羂索観音像とかわって講堂本尊となったが[54]、奈良時代後半の阿弥陀信仰は女性に関係深い事例が多い。当麻曼荼羅が平安京を遠く離れた当麻寺にまつられたのは、特別の事情によるものと考えられ、当麻氏有縁の女性に関係することは確実と思われ、従来の諸説もいずれも同様である。

当麻曼荼羅の本願については多くの論考がある。藤原明子にあてたのは猪熊兼繁氏で、明子は嵯峨天皇と当麻氏女の間に生れた源潔姫を母、藤原良房を父とし、文徳天皇女御、清和天皇の母に当る[55]。明石染人氏は国産は不可能と考え、豊成との関係を見直そうとされ[56]、福山敏男氏は豊成が後にヨコハギノ大納言と称されるはずはないので、実在の人物に結び付けることは行き過ぎとされ[57]、田中日佐夫氏は藤原百能が亡母らの追善供養のために曼荼羅を施入されたのではないかと考えられた[58]。

河原由雄氏は当麻曼荼羅の成立と発展の状況を詳しく分析検討されており、有力なのは百能であるが、銘文に見える天平宝字七年六月二三日は仲麻呂の室の宇比良古の丁度一周忌に当るので、この女性のために造られた可能性も考えられた[59]。

浜田隆氏は可能性の最も高いのは藤原麿の夫人で百能の母の当麻氏女とされたが、その後百能の母の当麻氏女、当麻山背、百能、袁比良などをあげられ、決手はないとされている[60]。田村円澄氏も百能が曼荼羅安置になんらかの役割をつとめたとされた[61]。志水正司氏は山背あたりが発願主となり、当麻氏の人々によって織成されたものと考えられた[62]。

柳沢孝氏は八世紀中頃、中国中原で完成したものと見られ、縁起文は空白のまま渡来し、宝亀九年（七七八）一〇月帰国の遣唐使か、天応元年（七八一）帰国の送唐客使によってもたらされたものとされ、化女の一夜織成の伝説はこの施入が当麻寺にとって奇跡的なことであったと考えられたが[63]、本願としては藤原百能またはその母をあげる説が多く、渡来品とみる見解も強い。

曼荼羅が当麻氏有縁の高貴な女性に関係があるとする見解は諸説に共通しているが、当麻氏有縁の女性としてどのような人物が考えられるであろうか。

淳仁天皇の母当麻山背大夫人は当麻老の娘で舎人親王の室、淳仁天皇は孝謙天皇から譲位されて天平宝字二年（七五八）即位したが、保良宮で上皇と隙を生じ、仲麻呂が同八年九月乱に倒れると廃され、同十月に母とともに淡路に送られた。配流とともに、従五位下佐伯宿弥助が淡路守となったが、天平神護元年二月、佐伯宿弥助に勅し、彼の国に配流した罪人（廃帝）が逃亡しようとしており、商人と詐って訪れる人を自今以後一切禁断せよと命じている。同年一〇月淳仁は垣をこえて逃げようとして翌日院中に薨じた。恐らく殺されたのであろう。宝亀九年三月に光仁天皇の勅により、淳仁の墓を山陵、先妣当麻氏の墓を御墓と称し[64]、『延喜式』にも廃帝の淡路陵と当麻氏の淡路墓をあげている。

百能は藤原麿と当麻氏女の間に生れ、豊成の室となり、豊成没後は後宮に供奉し、延暦元年（七八二）四月に六三才で薨じた。時に従二位尚侍であった[65]。

当麻真人浦虫は正六位上当麻継麻呂の娘、永く後宮に仕え、弘仁七年（八一六）典殿、同十三年従五位下となり、次第に昇進して嘉祥三年（八五〇）七月正四位下、貞観元年（八五九）八月に八十才で死んだが、『三代実録』に一生独身で過し、禁内の礼式を納めたと記されている[66]。

源潔姫は藤原良房の室、嵯峨天皇と当麻氏女の間に生れ、弘仁五年（八一四）源の姓を賜わり、承和八年（八四一）一一月無位から正四位下、仁寿三年（八五三）三月正三位、斉衡三年（八五六）没、天安二年（八五八）に帝の外祖母の故を以て正一位が送られた[67]。妹の全姫は元慶六年（八八二）正月没、時に尚侍正二位であった[68]。

藤原明子は良房と潔姫の子で、文徳天皇女御、清和天皇の生母である。天安二年（八五八）一一月皇太夫人、貞観六年（八六四）正月皇太后、元慶六年（八八二）太皇太后宮となり、昌泰三年（九〇〇）五月に七三才で薨じた[69]。歴史に名を残す当麻氏の女は多いが、それらの中では特に高貴な女性として山背大夫人、百能の母、源潔姫の母の当麻氏女があげられ、当麻氏女を母とする女性に百能、源潔姫、同全姫がいる。

当時の阿弥陀信仰の状況からみると、当麻曼荼羅はある故人の追善のために当麻寺に納められたはずである。当麻氏女の中で特に手厚い追善供養を必要とした女性としては当麻山背大夫人があげられる。山背は淳仁天皇とともに淡路に配流され、宝亀九年以前に淡路で死んでいる。光仁天皇は宝亀三年廃帝を改葬し、斉を設け、浄行者二人を墓の傍に盧せしめ、同九年には勅を以て親王の墓を山陵、当麻氏の墓を御墓と称したが[70]、二人はうらみを抱いて死んだものと考えられる。

一方、宝亀三年（七七二）三月皇后井上内親王が巫蠱の罪に坐して皇后を廃され、同四年他戸親王とともに大和国宇智郡没官の宅に幽閉され、同六年二人とも死んでいる。同八年宮中しきりに妖怪のことがあり、同六年一二月と九年正月に内親王を改葬して御墓と称した[71]。これらは皇太子山部親王の枕席安らかならざるを以て讀経・出家等を行っているが、井上内親王・淳仁天皇に対する措置もこのためであろう。

延暦四年（七八五）長岡京造営中に藤原種継が暗殺されると、皇太子早良親王は乙訓寺に幽閉され、配流の途中、飯食を絶って絶命し、そのまま淡路に葬られた。延暦六年に淡路国に令し、守戸一烟を置いて墓域を整備し、同一一年六月皇太子安殿親王の久しい病が早良親王のたたりとして諸陵頭らを遣して霊に謝し、同一六年五月にも僧二人に転読悔過をさせ、同一九年七月詔を以て早良親王に崇道天皇を追称、井上内親王を皇后に復称して共に山陵と称した[72]。同二四年聖体不予を以て淡路国に崇道天皇のために寺を造り、宮中、春宮坊に大般若経を読ましめ、霊安寺に小倉を造り、稲・綿を納めて怨魂を慰めた。さらに同年諸国に崇道天皇のために小倉を造り、正税を納めしめ、国忌及び奉幣の例によって怨霊に謝し、改葬崇道天皇司を任じた[73]。

大同四年（八〇九）にも大旱を井上内親王のたたりとして陵内を掃除読経し、弘仁元年（八一〇）七月には聖体不予を以て皇后乙牟漏の高畠陵を鎮蔡、崇道天皇のために百人、伊予親王のために一〇人、夫人藤原吉子のために二十人を度し、崇道天皇のために川原寺で法華経を書写、同年一二月にも吉野陵で読経した[74]。

井上内親王のためにも五條に霊安寺が建てられた。霊安寺は五條市霊安寺町の御霊神社の鎮座する台地にあり、塔跡が残る。昭和三八年二月、宅地化の計画で自然石を移動しようとしたところ、伯牙弾琴鏡一面、瑞花双鳳八花鏡一面、蔓草双鳥八花鏡二面、饗銅鏡二面のほか、開元通宝二、万年通宝二、隆平永宝一枚が発見され、同年末発掘調査を行い、この土壇が塔跡で中央の自然石は心礎、発見物は心礎下の納入物と確認された。塔の初重柱間は五・二五m、中央間約二・〇五m、脇の間一・六〇m、基壇一辺約一〇・二五m、高さ約〇・七mで、万年通宝・開元通宝は手ずれがあるが、隆平永宝は鋳上がりのままのような状態であったので、隆平永宝初鋳の延暦一五年から余り降らず、延暦末年頃と考えられた[75]。これは延暦二四年に崇道天皇のために淡路国に寺を建て、小倉を建てたこと、『日本後紀』同年五月一一日に聖躬平善のため伝燈法師位聴福を紀伊国伊都郡に遣して三重塔を立てたこととも符合する[76]。五條では井上内親王のために塔を備えた伽藍が造営された。女性のための寺であるから、金堂の本尊は阿弥陀如来像か阿弥陀浄土変であったのであろう。弘仁元年（八一〇）九月には同族の従五位下当麻真人鱸麻呂が淡路權守に任ぜられたのも、大夫人を弔う意味も含まれていたのではなかろうか[77]。

当麻曼荼羅が特に当麻寺に安置されたのは、悲運に倒れ、手厚い追善を必要とした当麻氏女性のためであったとみて誤りないと考えられるが、曼荼羅の製作年代と伝える天平宝字七年の翌年、同八年の仲麻呂の乱後、淡路国に送られてかの地で死んだ淳仁天皇の母当麻山背大夫人の追善と考えるのが最もふさわしいと思われる。安置後も忌日には法会が行われたであろうが、その後本来の由緒が山背大夫人の追善から、伝当寺創立者麻呂子親王夫人の本願と誤り伝えられるようになり、さらに鎌倉時代近くなって麻呂子親王と曼荼羅の年代の不合理のために、ヨコハギ大納言の娘とする説があらわれ、その後信仰の発展とともに縁起が発展したのであろう。

結　語

曼荼羅堂の前身堂は奈良時代よりやや降り、平安時代初頭頃に桁行七間、梁間四間、寄棟造の堂として建てられたが、当初から当麻曼荼羅厨子を安置するために建てられたことは旧仏壇上の厨子の高さが、内陣大虹梁下端に丁度よく納まること、厨子自体も装飾の豊かなもので、製作年代も前身曼荼羅堂と同様に平安時代初頭頃に推定されることから疑いないところである。また、前身堂建立に当たり、多量の古材を造り替えて転用しているが、その古材は簡単な構造の掘立柱の、小壁の特に高い宮殿関係の建物の材で、二棟以上の材料が運ばれている。構造の復原出来るのは二棟で、いずれもほぼ同様の規模構造の建物であった。平城宮遷都、難波宮の廃止などにより不要となった建物の一部が奉納されたものであろうが、そのもとの所在は明確でない[19]。

また、厨子についても、平安時代初頭に造られた二重の基壇をもつ長六角平面で曼荼羅の大きさともよく符合し、細長い不整五角形の柱六本を立て、てり起りの屋根を支え、平脱・金銀絵・飾金具で全面を装飾された華麗きわまりないものであったが、この製作は当麻一族の力で可能なものとは到底考えられず、内匠寮が製作に当たったのではないかと推定した。ここにまつられた阿弥陀浄土変相図は長さ・幅とも四mに近い綴織（織成）の大作で、わが国では製作不可能と思われ、一般に考えられているように唐から渡来したものとの考えが支持される。このような見事な変相図がこの当麻寺に納められたのは、特に丁重な追善を要する当麻氏有縁の女性のためと考えると、その女性として当麻山背大夫人が最もふさわしい。このような曼荼羅安置のために前身曼荼羅堂が建立され、これに多量の宮殿の古材が施入され、厨子は内匠寮で曼荼羅にふさわしいものが製作され、ここに曼荼羅が安置された。このように、いずれも一連の仕事であることは確実であり、これには官の全般的な関与があったものと考えられる。この時期は曼荼羅堂建立年代、厨子製作年代とともに、早良親王のために淡路に寺が建てられ、井上内親王のために五條に霊安寺が建立された延暦末年頃が最も適切な時期であろう。

当麻曼荼羅についてはすでに多くのすぐれた論考があり、仏教学でも早くから注目されている。かつて曼荼羅堂と厨子の解体修理の直接現場の関係者として、修理後の考えをふくめて私見を述べたので、御教示と御批判を賜わりたい。

註

(1)『国宝当麻寺本堂修理工事報告書』奈良県教育委員会　昭和三五年
岡田英男「当麻寺本堂修理工事の成果」『仏教芸術』45　昭和三六年
同　「本堂（曼荼羅堂）『大和古寺大観二　当麻寺』岩波書店　昭和五八年

(2)岡田英男「古代における建造物移築再用の様相」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』同朋社　昭和五八年
同　『古代建造物の構造技法復原に関する研究』私家版　昭和六一年

(3)服部勝吉『日本古建築史第三冊』田中平安堂　大正一五年
藤原義一「奈良時代後期の建築」『東洋美術特輯日本美術史　第五冊奈良時代下」飛鳥園　昭和八年
同　『日本古建築図録上巻』京都書院　昭和二三年
天沼俊一『日本建築史図録鎌倉上』星野書店　昭和九年

(4)曼荼羅堂棟木下端墨書
永暦二年辛巳三月八日辛申時上棟矣
少別当大法師勝俊　是史（吏）法務正僧正御任
預所法師弁幸　寺僧一百余人　一和尚延深
大法師隠俊
僧観智　僧観融　僧増資
公文僧始昌清
結縁緇素

(5)扉子扉金蒔絵銘　末尾年号等のみ記す。人名略

南より一扉

曼荼羅御厨子修理結縁衆等

北より一扉

仁治三年壬寅歳次五月廿三日　大勧進阿闍梨禅良

厨子北側面菱欄間下框墨書

仁治三年壬寅歳次七月七日御厨子修理御扉新注□　大勧進真順阿闍梨禅良　小聖人□郡房賀後阿闍梨之第子也

厨子正面方立蝶番（南上より一）墨書

仁治三年壬寅七月七日／施入良蓮房西願生／冊五也住□□僧

仏壇正面上框螺鈿銘

（向かって右）奉貝磨了／寛元元年癸卯／五月　日／尼真蓮□

（向かって左）貝磨匠／沙弥連仏／尼妙連／源近綱

(6)注2岡田論考

(7)金堂棟木添木墨書（現在所在不明）

壽永参年甲辰歳次二月十九日戊寅棟上　別当權僧正法印大和尚位信円　預所己—

—講円長　少別当□治承四年庚子歳次依平家乱□

天沼俊一「続奈良県金石年表」『第五回奈良県史蹟勝地調査会報告』別冊　大正七年

高田十郎「当麻寺講堂その他の銘文」『大和志』二巻九号　昭和一〇年

土井　実「当麻寺棟札等の銘文」『大和志』一〇巻一一号　昭和一八年

(8)講堂棟木墨書

乾元弐年癸卯歳次四月廿二日　禅林寺大講堂棟上　別当前法務前大僧正法印—

—大和尚位覚照　惣勧進僧栄生　大勧進真阿少別当大法師俊信　勧進定算大工敷位藤原助友等　寺僧等—

（以下人名略）

(9)新庄町史編集委員会『改訂新庄町史本篇』新庄町　昭和五十九年

(10)『重要文化財不動院本堂修理工事報告書』奈良県教育委員会　昭和四二年

(11)奈良県北葛城郡役所編集『大和北葛城郡史上巻』池上安正発行　明治三七年

大和高田市史編集委員会『大和高田市史』大和高田市役所　昭和三三年

同　『改訂大和高田市史前編』大和高田市役所　昭和五九年

(12)注(1)　修理工事報告書

岡田英男『古代建造物の構造技法復原に関する研究』私家版　昭和六一年

(13)藤原義一「奈良時代後期の建築」『東洋美術特輯日本美術史　第五冊奈良時代下』飛鳥園　昭和九年

同書の当麻寺東塔及西塔の項で「曼荼羅堂も鎌倉時代のものであるが、内陣の構架に奈良時代の様式を存しているのは注意すべき」と述べられた。なお、この二重虹梁蟇股構架については左記にも紹介されている。

天沼俊一『日本建築史図録鎌倉上』星野書店　昭和九年

なお、藤原義一氏は『日本古建築図録上巻』においても内陣構架を紹介されるとともに、大虹梁上端にもと合掌の組まれていたらしい穴があり、移建時代に於ける建築事情に関連する問題も伏在することを指摘されている。

(14)浅野清「当麻寺曼荼羅堂の原形に就いて」『史迹と美術』二二七号　昭和二七年

(15)奈良時代の丸桁は現存する遺構はすべて円形で、上端の水平部分はこの前身堂に始めてあらわれる。

(16)えつり穴は中央にあぜを残して両方からくぐり穴をほり、ここになわでくくるもので、古墳時代のしゅらにすでに見られる古い手法である。法隆寺東院礼堂前身建物の垂木、法隆寺大講堂の垂木・野垂木に発見され、法隆寺金堂・同中門、唐招提寺経蔵、当麻寺本堂、大神神社摂社大直禰子神社拝殿（もと大神寺本堂）など広く発見されている。垂木上端にほっ

て小舞をくくり付けるものが多いが、桁上端にほって垂木をなわぐくりとした例、桁・頭貫下端にほって壁小舞をあんだものがある。

(17)法隆寺東院伝法堂においてはじめて確認された古い手法で、西暦千年ころの法隆寺鐘楼上層柱にその痕跡が見られるので、この頃まで使用された。

(18)奈良時代には二棟の建物を前後に並べて建て、中間の雨水を樋で抜いて二棟を一体に使う雙堂があったが、平安時代になると雙堂よりも孫庇を付けることが広く行われた。

伊藤延男『中世和様建築の研究』彰国社　昭和三六年

(19)注(2)の岡田論考、なお、奈良時代の石山寺仏堂は礎石建であったが、福山敏男氏の研究によれば、前身建物とほぼ同様の簡単な構造であった。また大神神社摂社大直禰子神社本殿の前身建物は奈良時代の建立で礎石建であったが、これもほぼ同様の簡単な構造であった。前身建物のような構造は、筆者は掘立柱特有の構造と考えていたが、礎石建の物合にも同様の構造が用いられたと考えなければならなくなった。

福山敏男「奈良時代に於ける石山寺の造営」『宝雲』第五・七・十・十二冊、昭和八～一〇年、『日本建築史の研究』桑名文星堂　昭和一八年、綜芸舎　昭和五五年

(20)注(14)の論考で浅野清氏は「この厨子に用いられている八角形（実際は不正五角形）の断面を持つ柱等は法隆寺伝法堂や夢殿で発見された奈良時代の厨子に見られたものとよく似ており、厨子も亦鎌倉時代当りに創造されたものとは著しく趣を異にしているので、これを徹底的に調査する時は、或は厨子の原型も判ってくるかも知れないという予感を持たされるのである。」と述べられている。実際は、扉・連子・欄間等が補われ、塗替えられていただけで、その原型は容易に復原された。

(21)北村大通「当麻曼荼羅厨子に就いて」『仏教芸術』45　昭和三六年

岡田英男、井上正、河田貞「当麻曼荼羅厨子」『大和古寺大観第二巻　当麻寺』岩波書店　昭和五三年

井上正氏はこの厨子に加えられた当初の装飾技法は八世紀にさかんに用いられた技法を併せ用い、様式的にも正倉院工芸との間にさほど大きな隔たりを認めることはできない。一方天平時代にのみ特有の諸技法を併せ用いて多くの工人が協力する体制は、当時としては官営造仏所以外に考えられない。このような考え方に立てば、延暦八年（七八九）の造東大寺司の廃止が一つの区切りとして重要な意味をもつことになるが、そののちも諸技法は存続していたものと想像され、本厨子の製作年代はなお幅広く考えられるべきであろう。と述べられている。前稿の末尾で著者は厨子の製作年代を天平時代末及至平安時代初頭と考えられるとしたが、現在では本文中に記したように前身曼荼羅堂建立と同時期、延暦末年頃を中心に考えている。

(22)神護景雲元年八月卅日「阿弥陀悔過料資財帳」『大日本古文書』東大寺文書　号外

阿弥陀浄土変一舗

宝殿一基　準八角　高一丈六尺三寸

蓋　頂居金花形一枠　八角居金鳳形八口　各所雑玉幡
裏蓋大金花形一枚　並以金銀墨畫飛井鳥宝花等形

柱八枝　並以金銀墨畫鳥花等形

基二階　上階池蓮敷瑠璃地辺若金銀牌金井畫飛井等形
下階在連子看金銀牌端裏等百欄上居金花八枠

(23)宝亀十一年十二月二十五日『西大寺資財流記帳』「仏菩薩像第三」薬師金堂の項

観世音菩薩埵像一躯　彩色、以雜玉飾、
高三尺四寸

彩色蓮華座　六角三階華足

円光　金物装物

居六角殿後、高六尺、並表裏柱扉等並塗、
其扉六具、菩薩像絵像

六角蓋後、上居彩色鳳形、毎縁
端居鳳凰形、雑雑玉幡

小幡六流各長四尺七寸、以金
銅装物并雑玉磅

褥一枚（紫地黒面錦表 浅緑裏）
居六角牙床（高壱尺四寸、長七尺、広五尺七寸、押金銅妹金等）
又六角小床（高七寸五分、長五尺、広四尺壱寸、高七寸、并角等押金銅妹金等、漆）
敷褥一枚（雲間錦表、布裏）

「同」「經律論疏第四」の厨子七基并漆塗のうち、

六角漆殿二宇（各高六尺、長六尺五寸、広三尺五寸、宇檐張赤紫羅、錦縁、並上立鳳形一双、横端別坐花玉瓔珞六流、長五尺七寸、糸幡四縁、並裏着花鏡一面）
呉床一基（菅金銅妹金、教紫褥一床）
居床一前（深胡粉、教錦褥一床、裏浅緑縁）

(24)「延喜式」「内匠寮」

凡毎年元正。前一日官人率木工長上雑工等。装飾大極殿高御座。（蓋作八角。一角別上立木鳳凰。下垂以玉瓔珞。毎面懸鏡三面。当頂著大鏡一面。蓋上立大鳳凰。物鳳凰九隻。鏡廿五面。鏡台一十二基。立高御座東西各四間。）
（以下略）

「同」「内蔵寮」

元正預前装飾大極殿。鳳形九隻。順鏡二十五面。玉幡八旒。玉冠甲十六條。鄣子十二枚（紫紅花鏡表。）帳二條。（浅紫綾裏。緋綾裏。）上敷両面二條。下敷布帳一條。（已上高御座料。）

「文安御即位調度図」

高御座（高御座、大鳳形、黄色、以比木造之、以金薄押之、高一尺七寸）
高御座蓋上立大鳳形一翼（高一尺許、南向）薄風八角上立小鳳形各一翼（高一尺許、向其方）
南面薄風上竝立鏡五面（有順光、大五寸許）其鏡中央、三面、東西間立堀物至唐草
各一面（北面准之）自余立鏡三面、其中央鏡左右立同一本、
南面（草）北面同之、東面（草）自余五面同之、
蓋裏内着大鏡一面、（以鏡裏金銅入以六寸釘固之）角木下懸玉旒各一旒、其内入一尺許懸
至帽額（以下略）

(25)厨子の六枚の扉板に記された多数の人名の中で、南より一扉中央上部に次の四人の人名を大きく記す。枠内は金地黒抜き、他は黒漆地に金蒔絵であらわす。

暉子内親王
後一条前摂政
前右近衛大将源頼朝
従二位源氏女

北より一（南より六）扉の中央上部に次の四名の人名を大きく記す。金地に黒抜き、頼経は金地黒漆文字。

金剛仏子行恵
菩薩戒尼清浄如
征夷大将軍源頼経
菩薩戒尼寂静恵

このうち、行恵は藤原（九条）道家、後一條前摂政は道家の子で父とともに一條殿に住み、貞永元年（一二三二）から嘉禎元年（一二三五）まで摂政をつとめ、同年に死んだ九条教実にあたり、従二位源氏女は北条政子であり、頼経も道家の長子である。道家の妻倫子は一条能保の娘で、その母は源義朝の娘、頼朝の同母妹で両家はごく近い関係にあった。（『大和古寺大観』第二巻）。

暉子内親王については、鳥羽院と美福門院の子で建暦元年（一二一一）七五才で亡くなられた八條院暉子にあてられているが、前記人名は将軍家と道家のごく近い身内と考えられるので、道家と妻倫子の娘で後堀河中宮の藻璧門院蟑子の子、仁治三年に一五才であった暉子内親王（室町院）の方が字画がやや異なるが適当なのではないだろうか。清浄如は陰明門院麗子にあてる考えがあるが、鎌倉時代の高貴な女性に法名を清浄□とする例が少なくないので、道家にごく近い女性を考えると、天福元年（一二三三）九月一八日に皇子を死産して死んだ蟑子の方が適当だと思われるが、その法名が明らかに出来ない。

寂静恵も明らかでないが、人名の構成を見ると河原由雄氏も云われるように、道家の妻倫子と思われるが、その法名も今のところ明らかに出

来ない。

この厨子の仁治修理に、曼荼羅の研究とともに証空の力が大きかったと考えられるが、川勝政太郎氏は将軍家と道家一族の助力が大きかったのは、頼経が証空に師事しており、この機縁で広く勧進が実を結んだのではないかと考えられている。

『大日本史料』第五篇之九、天福元年九月一八日

藻璧門院御産、御生誕ノ皇子薨去アラセラレ、藻璧門院モ亦崩御アラセラル。

川勝政太郎「当麻寺總説」『当麻寺』近畿日本叢書第七冊　昭和三七年

近畿日本鉄道

同　「笠間時朝の作善とその背景（上）（下）」『史迹と美術』四三六・四三七号　昭和四八年

角田文衛『日本の女性名（上）』教育社歴史新書30　教育社　昭和五五年

湯之上隆「白河院藤原陳子とその周辺」『日本歴史』四八三号　昭和六三年

(26)注5

(27)厨子下成基壇南側面東格狭間朱漆銘

奉重修理／曼荼羅御厨子／瑠璃壇金物採色事／合享徳二年癸酉／自二月廿一日始之同卯月／廿三日仕上畢／執行少別当平則満／満寺法侶等／勧進所禅律師実秀／奉行藤原家晴／勧進聖善阿／塗士大工五郎三郎／仕手之人衆／祐阿弥　彦太郎／源十郎　五郎三郎／五郎次郎　太郎三郎／四郎次郎　四郎三郎／五郎三郎　新四郎／源二郎　五郎／源二郎　衛門二郎／四郎五郎　福一／梢松　新発意／松若　入同／阿子

(28)『実隆公記』享禄四年四月二十三日に「当麻寺本願聖云々（江州者）」とあるのが宗胤であろう。

(29)厨子正面鴨居金具刻銘

為生誉宗甫菩提　慶安三庚寅年

為延誉春貞菩提　貞享元甲子年十月九日

(30)河原由雄「綴織当麻曼荼羅図、当麻曼荼羅図（文亀本）、当麻曼荼羅図（貞享本）」『大和古寺大観第二巻　当麻寺』岩波書店　昭和五三年

同　「当麻曼荼羅縁起の成立とその周辺」『日本絵巻大成30　当麻曼荼羅縁起　稚児観音縁起』中央公論社　昭和五四年

同　『日本の古寺美術Ⅱ　当麻寺』保育社　昭和六三年

同　「敦煌浄土変相の成立と展開」『仏教芸術』68　昭和四三年

同　「当麻曼荼羅の諸相」『当麻町史』当麻町教育委員会　昭和五一年

(31)龍村　謙「観当麻曼荼羅」『仏教芸術』45　昭和三六年

龍村平蔵「綴織当麻曼荼羅について」『国宝綴織当麻曼荼羅』校正出版社　昭和三六年

(32)大賀八郎「当麻曼荼羅原本の研究（上）（下）」『国華』四十八輯七冊・八冊　昭和一三年

同　「当麻曼荼羅は綴織である」『古文化財の科学』一号　昭和二六年

(33)大田英蔵「綴織当麻曼荼羅について」『国宝綴織当麻曼荼羅』文化財保護委員会　昭和三八年

柳沢　孝「綴織当麻曼荼羅について」『大和古寺二　当麻寺』岩波書店　昭和五一年

(34)野間清六「文献上より見たる奈良時代の絵画」『仏教芸術』9　昭和二五年

(35)渡辺明義「禅林寺蔵当麻曼荼羅の軸木銘について」『仏教芸術』122　昭和五四年

(36)志水正司「当麻曼荼羅の成立と背景」『史学』五一巻三号　昭和三六年

(37)『大乗院寺社雑事記』延徳三年十月十八日、明応五年十月二日条

『当麻曼荼羅疏』縁起巻第八　釈新曼陀羅并流布

『大日本史料』第四編の十四　建保五年　大和国当麻寺ノ新曼陀羅成ル、

(38)『大乗院寺社雑事記』延徳三年十月十八日条

(39)明応七年四月に一乗院が他所に出たものを買いもどし、もとの如く当麻

寺に納めているので（『雑事記』明応七年四月二日）、失われたのはそれ以降、文亀三年以前となるが、文亀二年畠山尚長が大和に攻入り越智城を落し、同五月細川政之は沢蔵軒を遣して尚長を志貴山城に攻めるなど、当時大和は争乱の絶え間がなかったので、その時期は確定しがたい。

(40)川勝政太郎「当麻寺文亀曼荼羅の銘文について」『史迹と美術』二三八号　昭和二八年

河原由雄「当麻曼荼羅図（文亀本）」『大和古寺大観第二冊』

同　「当麻曼荼羅の諸相」『当麻町史』当麻町教育委員会　昭和五一年

(41)『大乗院寺社雑事記』永正四年五月二十三日

(42)当麻寺薬師堂棟木銘

奉新造上棟当麻寺薬師堂一宇　文安三年丁卯（癸）卯月十三日執行小別当平——則満（大勧進所僧師実秀　満寺衆徒并万民等）大工大原宗継（下略）

(43)奈良県北葛城郡役所編纂『大和北葛城郡史』上巻　池上安正発行　明治三七年

堀江彦三郎「中世の高田」『大和高田市史』大和高田市役所　昭和三三年

同　「中世の高田」『改訂大和高田市史　前編』大和高田市　昭和五九年

(44)前記市史

(45)注(35)

延宝七年貞享曼荼羅軸内納入願文。注(1)の『修理工事報告書』

(46)『続日本紀』延暦八年三月戊午（十六）。

(47)中西康裕「内匠寮考」『ヒストリア』九八号　昭和五八年

(48)『続日本紀』天平宝字七年正月壬子（九）。神護景雲元年三月己巳（二十）。同七月丁巳（十）。同八月丁午（九）。宝亀三年十一月朔。

(49)『続日本紀』神護景雲元年二月戊申（廿八）。七月癸亥（十六）。八月丙午（廿九）。

(50)『日本書紀』舒明十二年五月丁酉朔。白雉三年夏四月朔。

(51)井上光貞『日本浄土教成立史の研究』山川出版社　昭和三一年

大野達之助『上代の浄土教』吉川弘文館　昭和四七年

伊藤唯真『阿弥陀信仰』民衆宗教史叢書11　雄山閣　昭和五九年

(52)『続日本紀』天平宝字四年七月癸丑（廿八）。五年六月庚申（七）。

(53)『興福寺流記』東院の項『奈良六大寺大観七　興福寺一』の史料　岩波書店　昭和四四年

(54)同右講堂の項

(55)猪熊兼繁「当麻曼荼羅縁起考」『史迹と美術』一三九号　昭和七年

(56)明石染人「当麻曼荼羅の諸問題」『史迹と美術』一七八号　昭和二二年

(57)福山敏男「当麻寺の歴史」『仏教芸術』45　昭和三六年　『寺院建築の研究上』福山敏男著作集一　中央公論美術出版　昭和五一年

(58)田中日佐夫「当麻曼陀羅の周辺」『仏教芸術』49　昭和三七年

同　『二上山』学生社　昭和四二年

(59)河原由雄　注30論考

(60)浜田　隆「当麻寺の絵画—とくに当麻曼荼羅を中心として」『当麻寺』近畿日本叢書第七冊　近畿日本鉄道　昭和三七年

同　「当麻曼荼羅の成立とその変遷」『国宝綴織当麻曼荼羅』佼正出版社　昭和五二年

同　「古代の阿弥陀浄土信仰と浄土教美術の展開」『室生寺と南大和の古寺』日本古寺美術全集第八巻　学生社　昭和五七年

(61)田村円澄「天平時代の文化と信仰形態」『国宝綴織当麻曼荼羅図』佼正出版社　昭和五二年

(62)注34志水正司論考

(63)注33の柳沢孝論考

(64)『続日本紀』天平宝字八年十月壬申（九）。天平神護元年二月乙亥（十八）。

同　十月庚辰（廿一）。宝亀九年三月己巳（廿二）。

(65)『続日本紀』延暦元年四月己巳（十七）。

(66)『三代実録』貞観元年八月十日癸巳。
(67)『日本紀略』斉衡三年五月丙申。
(68)『三代実録』元慶六年正月廿五日戊辰。
(69)『大日本史料』第一編之二。
　昌泰三年五月十二日太皇太后藤原明子崩ズ。
(70)『続日本紀』宝亀九年三月己巳に次のように見え、山背はこの時までに死んでいる。廃帝と同時に殺された可能性も考えられる。
　勅。淡路親王墓宜称山陵。其先世当麻氏墓。称御墓宜随近百姓一戸守之。
(71)『続日本紀』宝亀九年正月戊申朔。同四年十月辛酉。同六年四月己丑。
　同八年三月辛未。同十二月乙巳。同九年正月丁卯。
(72)『続日本紀』延暦四年九月乙卯。『日本紀略』延暦四年九月庚申。同十月庚午。同十一年六月癸巳。同六月庚子。同十六年五月乙巳。
　同延暦十九年七月己未。
　詔曰。云々。宜故皇太子早良親王追称崇道天皇。故廃皇后井上内親王追復称皇后。其墓並称山陵。（以下略）
(73)『日本後紀』延暦二十四年春正月甲申。
　奉為崇道天皇、建寺於淡路国。
　同二十四年二月丙午。
　令僧一百五十人。於宮中及春宮坊等、讀大般若経。造一小倉於霊安寺。納稲卅束。又別收調綿百五十斤、庸綿百五十斤。慰神霊之怨魂也。
　同四月甲辰。
　令諸国、奉為崇道天皇、建小倉、納正税卌束、并預国忌及奉幣之例、謝怨霊也、
　同二十四年四月庚戌。
　任改葬崇道天皇司。
(74)『日本紀略』大同四年七月丁未。弘仁元年七月辛亥、同丙辰、同乙丑、十二月甲申。
(75)小島俊次「霊安寺塔跡の調査」『大和文化研究』九巻三号　昭和三九年
　同　「奈良県五條市霊安寺塔跡」『日本考古学年報一六』　昭和二八年度　誠文堂新光社　昭和四三年
　文化庁、東京国立博物館「高松塚などからの新発見の考古品―文化庁保管の埋蔵文化財（昭和40～50年度）」昭和五二年
(76)『日本後紀』延暦二十四年五月乙卯。
　（前略）此日遣修行伝燈法師位聴福於紀伊国伊都郡。立三重塔。爲聖躬平善也。
(77)『日本後紀』弘仁元年九月壬子。
　従五位下当麻真人鯔麻呂為淡路權守。
(78)平城上皇が大同四年（八〇九）平城宮に帰って宮を造営し、天長元年（八二四）崩じている。平城宮第一次大極殿地域では、平城上皇御在所と考えられる宮殿群が発掘されている。平城崩後、これらの宮殿宮衙の建物も不要となったはずで、奈良時代建立の建物を平城上皇御在所の建物に転用し、これら古材から当麻寺に施入された可能性も考えられないことはないが、前身曼荼羅堂の造立、従って厨子の製作、曼荼羅の奉安がこの時期を降ることはないと考えられる。
　『平城宮発掘調査報告　第一次大極殿地域の調査』奈良国立文化財研究所三十周年記念学報第40冊　昭和五七年

An Architectural Implication of Taima Mandara in Ancient JAPAN

Hideo OKADA

Summary

Taima mandara has been housed in the Zushi shrine inside the inner sanctuary of Mandara hall at Taima temple. It has been believed that they were built in Kamakura period. However, by the new knock down repair work, the fact that the Hall was rebuilt in 1162 A.D. can be confirmed. Because of many old timbers reused among the structures, a predecessor of the Hall built in early of Heian period could be supposed architecturally. And still older woods, as the double rainbow beams and the frog's leg struts in Nara style have been contained also in the structure of the sanctuary. They have derived from two ancient buildings, simple structure with high pillars, probably such as a palace.

Although, in 1242 A.D. new doors and renji windows were attached to the Zushi, with repainting work, it had been originally built in early of Heian period, same as the pre-Hall. So we can find several traditional works on it, such as embedding of gold plate cutouts. The Mandara in the Zushi is a copy made in Muromachi period in truth. The original one, 394.8cm ×396.8cm on woven tapestry, that was perhaps made at the time of T'ang in China, has been kept at the special storage in the temple. It might be dedicated for a late respectable woman of Taima families, possibly for "Yamashiro Daibunin", by my conjecture. She was a mother of the emperor Junnin, and then was exiled to Awaji island at the political coup d'etat in 764 A.D. of Nara period.